『荒野に立つ』text by 長塚圭史

人物

朝緒
玲音
田端
美雲

父
母
佐藤

担任教師

目玉探偵A
目玉探偵B
目玉探偵C（謎郎）
緑秘書

若き映画監督

新聞配達人
女生徒（逃亡少女）
ダイケーマートの上司
ダイケーマートの同僚
カレー屋の店員
紛れた女
カビリア
受付嬢
店の男

音羽
高広

担任教師は語りかける

担任教師「やあ、どうも、いやいや、どうもどうも。こんにちは。ようこそ。暑い中。外は暑いですか？暑い。暑いですよね。そうでもない？いややっぱり暑いですよ。暑いです。中は涼しいですか。そうでもない？わかります。出来る限り快適にしたいと思いますが、時節柄、ご容赦頂けると幸いです。ええ。さて、皆さん、概ね準備は整ったようなので、お話を始めたいと思います。何だこの始まり方はと構えてしまった方々、どうぞお楽に、と言っても構えてしまった以上はどうすることも出来ないだろうということも容易に想像出来ますので、まあゆっくりと今日の気分で、お聞き頂けると。さて、ご覧の通り、私は女学校の教師をしております。してるんです。ええ。まあさほど優秀というほどの高校でもないのですが、なかなか私は満足しております。というのは、生徒たちがみんな魅力的だからです。授業を聞かずにふざけてばかり、あるいは居眠りをする、漫画を読む、通信機をこう見る、これじゃもう授業にならないと嘆く先生方も少なくないのは事実です。しかし私はそうは思わない。何故なら私は生徒たちに限りない期待を寄せているからです。期待をすると自然と生徒たちも動き出すんです。私は勉強出来るようになれなんて思ってません。ただ想像力を豊かにして欲しいと願うのです。想像力豊かな人間として社会に羽ばたいていって欲しいと。考える人間になって欲しい。だから我々教師は、生徒たちに考えるきっかけを与えること、これこそ職務であると私個人は認識しております。知識は詰め込むものではなく、何故その知識が必要なのかということを探り、その知識を得れば世界がぐんと開けて見えるという喜びを体感させる。教育というのはそう在るべきなのではないかと日々模索しながら教壇に立っています。教え方に答えはありません。きっと生きている間には答えは出ないでしょう。まったく不思議なものです。こうして一生懸命、教育について考えて考えて、答えが出ない。じゃ何の為にやっているのか。答えが出ないと知りながら、どうしてああでもないこうでもないと考えるのか。それよりも一度きりしかない人生なのだから、やりたいことをやりたいように、快楽を追い求める方がずっと有意義な人生なのではないか。しかし一度きりしかない人生だなんてこと誰が証明出来るのでしょう。誰も出来ない。じゃあ何なんでしょう我々は。というようなことを考え過ぎるとこの世界を形成している原子が歪んでずるんと、まさにこの足下に穴が空いて、ずるーんとと地球の向こう側に落ちて行ってしまうから、そういうことを考えるのは大概にしなさいと友人に忠告されまして、なるほど。尤もである、と私も納得し、私が教育に於いてすべきだと思う手法を探求、つまり職務を全うすることで、どうにかこうにか、この世界に、しがみついているわけです」

Nothing

Nothing。空を見つめる。虫を見つける。虫を追う。虫を追う。虫を追う。虫を追う。虫を捕まえる。虫を放す。また虫を追う。虫を追う。虫を捕まえる。虫を放す。また虫を追う。捕まえる。放してすぐに捕まえる。虫の羽を毟ってしまう。虫を置く。坐ってあるいは寝転んで。虫を見つめる。羽のない虫。空を見つめる。Nothing。ゼロ。声を出す。意味なく声を出す。思いついたことを口にしてみる。手術。解体。虫。蝶々。とんぼ。あめんぼう。等々。立ち上がって踊る。踊る。踊る。時折思いついた言葉を口にしつつ踊る。疲れる。でも踊る。身体を動かす。動かす動かす。疲れて座る。空を見つめる。横になる。空を見つめる。Nothing。どうしようもなくNothing。転がって。立ち上がって。レジを打つ。淡々とレジを打つ。ひたすらにレジを打つ。行列を打つ。Nothing。レジを離れる。レジは任せる。休憩する。空を見つめる。上司が身体を刷り寄せてくる。触られる。Nothing。別のバイトがやってくると上司離れて行く。バイトの子の非難の目。向き合ってみる。バイトの子は敗退して退散する。休憩。休憩にも疲れて。レジに戻る。レジを打つ。レジは鬱。鬱になる。鬱で打つ。話しかけられる。高校時代の同級生、田端だと名乗られる。鬱なのでどうでもいいのでへらへら不細工に笑って聞き流す。同級生の1人が死んだ知らせを受ける。喫茶店。もう生きるの嫌になって死んだみたいという涙ながらの話を聞かされる。益々鬱。誰だか思い出せない。益々鬱になる。「そうよ。亡くなったって言ったでしょう」「そう、そうだったかしらね」「そうよ。あんた、あんなに仲良しだったのにね。悲しいことばかり嫌ね」と母は泣く。この薄ぼんやりとした記憶の曖昧は何事だ。あんなに仲良しだったということが思い出せないのはどういうわけだ。部屋に逃げ込むと死んだ仲良しの葬式である。ああ、私の意思の元に私は動けているのかどうか自信がなくなる。次々と挨拶され同情されるが誰1人わからないので、先日スーパーに来た田端に、と言ってもそれほど思い出せないのだけれど、救いを求めようとする。そう思った時には見当たらない。気がつけば隣にいる女は誰だろう。こっちを見ている。知らない事をいいことに正直に話す。自分はもうほとんど何も覚えていないことを。だからこっち見るのはやめてください。隣の女は何らこの場と関わりのない話をしてくる。

隣の女「川を下るでしょう?」

まったく川の話なんかどうでもいいから消えて欲しい。「はあ、まあ時には下ることもありますね」

隣の女「川を下る時、川を自分が下っているというつもりでいるんだけど、実は川の方が上がってきているなんてことあるのかしら」

朝緒「はい?」

隣の女「そんなこともあるのかしらと思って」

危険を感じ、へらへら笑って誤摩化して、女を置いて焼香だけして帰ると、父母が別居中の旦那の話をしてくるので、とりあえず部屋に逃げるとまだそこは葬式の最中で私は相変わらず川の話をする女の隣にいる。ああもう死んでしまいたい。さっき帰ったところなのに。隣の女がまたこっちを見ているので、わざとらしくさっきと同じ

話をしてやると、隣の女もまったく同じ川の話を平然としてきたのでループ。危険を感じ、女を置いて焼香だけしてさっさと帰ると父母がまた旦那から電話があっただとかどうだとかうるさいので部屋に戻ると、川の女が田端と私の部屋に来ている。母がお茶を出すと「お構いなく」なんて言っている。「お友達、本当に残念なことになりますねえ」と素っ頓狂な事を話している母の記憶も混濁している。もうすでに仲良しは死んだのに、これから死ぬもののように話している。あれがあってから母もまた何かを喪失している。ああ、もうあれのことも思い出したくもないから考えない考えない。それにしてもどうしてここにこの女たちがいて、しかも一緒にやってきた田端もこの川の女について覚えていない様な無責任さは何だ。死んだその仲良し、名前を玲音という、がどうのこうのと言ってるが本当に覚えているのか。こっちは覚えていないってのに。馬鹿馬鹿しいので玲音のあることないこと創作して語る。しかしどれもこれも同意され共有されてしまうのはどういうことだ。うんざりするのでレジを鬱。レジ鬱レジ鬱。有り得ないことに田端と川の女も列に並んだので、もうその効果は相当に疑わしいが、それでも家に逃げ帰ると案の定、情けない顔した旦那がいて首を括りたくなる。父母が私に何か話しかけるが、私は逃げる。新聞配達人から逃げている少女とすれ違う。「佐藤くん追いたまえ」という父の掛け声のもと、犬のように旦那が追って来る。逃げる。隠れる。川の女が私を喫茶店に導く。

川の女「こっちよこっち」

私が飛び込んで涙ながらにあらゆるものから逃げ出したいと訴えると、旦那が鼻を利かして入店して来たので、目の前の水が青酸カリでありますよう祈って飲むけれど、やっぱりただの水で、仕方なく喫茶のテーブルに顔を埋める。と、「起きて」と美しい少女に起こされる。それは葬式で見たあの死んだ玲音で、ここは学校、高校の教室だった。

目覚めると教室で、目玉をなくしたと教えられる

思わず「え？私も死んだ？」と尋ねたが、玲音は「死んだ死んだ」と恐らく別の件について同意した。授業での失態について同意したのかもしれない。「よく寝たね～」と言われ、伸びをしてみると確かによく寝たような気がしてきた。担任教師が「寝過ぎだぞ」と私の頭を叩くとチャイムが鳴った。嫌な感じではなかった。見覚えのあるこの担任の先生は好きだった。けれど起きてから何かが不安でそわそわぐらぐらしていると玲音が「どうしたのよ？」と聞くので、「やばいやばいまたやっちゃったよ」を連発する私。田端がやってくる。田端は微妙に玲音にへりくだる。それを玲音は当然のことのように扱っている。田端も悪い。田端の甘えたような感じは悪だ。女生徒が新聞配達人から逃げているのを不思議な気持ちで眺める。「やばい」が増す。玲音と田端がそれを笑う。川の女がやってくる。二人きりで話したそうだったが、玲音に私を譲る気は無い。玲音の川の女への態度は不信感と敵意に満ちている。構わず川の女は言

う。「あなた、目玉をなくしたよ」。勿論訳がわからない。にもかかわらず「それでか」と私が答えたその時から、目玉を探す冒険は始まった。

目玉探偵登場

まずは探偵を雇う事から始めましょうと川の女は言った。玲音も田端も耳を疑った。川の女は彼女たちをまるで相手にせず、とにかく探偵社に行こうと話す。玲音が自分たちと話しているところに割り込むなと抗議したが川の女は相変わらずまったく相手にしなかった。どうしたらそんな探偵に会えるのかと聞くと、探偵事務所の秘書がもうそこに座っていた。美しいのだけれど、何処か集中力に欠け、それを押し隠すように丁寧にきっぱりと話しているという風情である。探偵の選び方は様々で3人いるということだった。3人ともに会えるかと川の女が聞くと、もう既にそこに3人ともいた。2人はかなり洗練された風で一緒におり、1人はかなり神経質そうであった。まずは2人組と話をしてみる。秘書も同席してくれた。無くした目玉の形や失った日時などを尋ねられるがかなり曖昧にしか答えられない。

目玉探偵A「どちらの目玉をなくしたのですか？」

私「え？」

目玉探偵B「どっち側のね、目玉をなくしたのかっていうことですよ」

私「え？だってそれは・・・え？どっちだろ？」

川の女「私からは何とも言えないけど」

私「え？どっちでしょう」

目玉探偵A「じゃどっちかっていうとどっちです？」

私「どっちかっていうと、右目？左目？」

目玉探偵B「じゃあどっちもどっちってことなんですかねえ」

目玉探偵A「どっちもどっちってことはないだろう」

目玉探偵B「どっちもどっちってこともねえ」

私「じゃあでもやっぱり右目かもしれません。左目かもしれないけど」

目玉探偵A「じゃあ右目ってことにしますか？左目って可能性も残しつつ」

目玉探偵B「じゃあ君」

秘書、書き込みつつ「右目なくす。左目の可能性残しつつ」

目玉探偵A「で、どこでなくされたのかな？」

私「はい？」

目玉探偵B「どこでね、目玉をなくしたのかってことですよ、その左目を」

目玉探偵A／秘書「右目」

目玉探偵B「右目を」

私「いや、それは・・・」

川の女「それがわからないからこうしてここに」

目玉探偵B「しかし何の当てもなく探すとなると・・・」
目玉探偵A「ま、でもそれは追々」
目玉探偵B「それは追々ということにしましょうか」
秘書「なくした場所は追々」
玲音「ねえ、それって本当になくしたの？目玉って」
私「たぶん、うん。なんとなく」
玲音「でもだってここにあるのよ」
私「そうなの？いやいや、そうなんだけど」
玲音「大体いい大人が何よ、目玉探しますだなんて」
目玉探偵A「何なんだろうな、このお嬢さんは」
玲音「何なのって何がよ？」
目玉探偵A「君もなくしたから来たんだろう？」
玲音「私はありますから、ここにこうして」
目玉探偵B「なくなっているという事態に、そもそも気がついていないのかもしれませんがね」
目玉探偵A「とにかく、ここに来るならその時に来て頂かないと、なくしたいので探したいと、そういう風でないと、こちらも対応しかねるなあ」
目玉探偵B「やりにくいですよね」
目玉探偵A「やりにくいはやりにくいよ」
目玉探偵B「緑くんもさあ、受付でストップしないと」
緑秘書「だってわかりませんよ。もういらっしゃっていたんですから。いらっしゃらないのならまだしも、いらっしゃってしまったからにはそうですから」
目玉探偵B「そういう風に反対に怒られちゃうと弱っちゃうんだよなあ。そこなんだよなあ緑さんのはそこ」
緑秘書「私の何が何なんですか？」
川の女「それよりもこの人の目玉なんですけど。ね」
私「あ、うん」
目玉探偵A「じゃあもう少し特徴を伺いますけど、ちょっと静かにしていてください」
玲音「何なのよもう」
目玉探偵A「手足はついてますか？」
私「はい？」
目玉探偵B「目玉にね、手や足がついてるかってことですよ」
緑秘書「つまり手足ついてる系ですか？それとも転がる系？」
私「え？目玉にってことですか？」
目玉探偵A「だから！あのね、こっちも遊んでるわけじゃないんですよ。目玉以外のことを目玉探す探偵が聞いてどうするんですか？ああもう、珈琲まだかね？」

緑秘書「珈琲？」
目玉探偵A「珈琲淹れてもらってもいいかな？」
玲音「これふざけてるんだわ。もう授業戻ろう朝緒」
川の女「だって目玉はどうなるの？」
玲音「だから目はここにあるからこうして」
目玉探偵B「あ、だから、もうその発想で来られるとお手上げですよね」
目玉探偵A「冷やかしなら帰ってくれないかなあ」
玲音「そっちが学生捕まえて冷やかしてんでしょう」
目玉探偵A「よし、じゃあもう終りにしよう。こっちも暇じゃないんだ。この時間なかったことにしよう」
目玉探偵B「え？この時間なかったことにしますか。それ時間かかるんだよな」
目玉探偵A「だってじゃあどうするんだ、この無駄な時間は？この時間なかったことにしつつ、緑くんの目玉探そうよ。そうしよう」
私「え？秘書さんも目玉探してらっしゃるんですか？」
緑秘書「まあ一応は」
玲音「もういいから帰ろうって」
川の女「手足のある目玉っていうケースあるんですか？」
目玉探偵A「いや前例はないですよ」
玲音「ほらもうふざけてんのよ」
目玉探偵A「だから・・・聞くんだよ！例え前例がなくても聞くの！じゃあもし手足があったらどうする？え？手足あったらどうすんの？ないと思っててあったらどうすんだよ？びっくりすんじゃないのか？びっくりしている間に折角見つけたもの捕まえられなかったらどうすんだよ。ああ、もう珈琲が飲みたい」
緑秘書「淹れてきましょうか」
目玉探偵B「そうしてもらえる？」
川の女「あの、具体的にはどうやって探し出すんですか」
玲音「ちょっと貴女ねえ」
川の女「文句があるなら貴女一人で戻ればいいでしょう」
玲音「だから戻るわよ。朝緒どうするの？もう行くでしょう？」
私「・・・」
玲音「いいわよ、じゃあ田端さんと帰るから。田端さん？あれ？田端は？一緒にいたわよね？」
緑秘書「なんだかふらふらと夕闇を歩いて行きましたよ」
玲音「ええ？まったく、勝手なことをして」
川の女「どうするの？」
玲音「1人で帰るわよ。教室はどっち？」
緑秘書「元来た道を戻ればいいんですよ」

玲音「元来た道？・・・そうね。いいわ。じゃあね朝緒」
私「うん、ごめんね玲音」
玲音「その人たち、私は信用出来ないけどな」
朝緒「・・・」
玲音「行くわ」
玲音は元来た道を失っているのか緑秘書が夕闇と言った方に歩いて行く。何度も振り返りながら。
私「大丈夫かしら、玲音」
川の女「気になる？」
私「少しね」
目玉探偵A「で、どうするのかな？」
川の女「私たちは探します。だけど、出来れば具体案を教えてください」
目玉探偵A「そりゃあ心当たりを探すのさ」
川の女「この場合は？」
目玉探偵A「いつ目玉をなくしたと感じたのかということがポイントになってくる」
川の女「いつなの？」
私「いつだったかしら」
目玉探偵A「不安を感じたろう？その時は？」
私「授業の後、玲音に起こされた後だわ」
目玉探偵B「何処に君はいたんだい」
私「私、ここ、この席でこうして眠っていました」
目玉探偵A「そのままで」
というとそこは教室で、担任教師は、わかっていると思っていても、それが何かと尋ねられると途端に不安になってしまうものについて話をしている。目玉探偵たちは朝緒の眠る机の周りを探す。川の女も一緒に。
目玉探偵A「どう？」
目玉探偵B「いやいや、ちょっとまだですねえ」
川の女「こうしていて見つかるものですか？」
目玉探偵A「いや、案外こういうシンプルなことだったりするんだよ。どれぐらいの大きさだっけ？」
目玉探偵B「あ、聞き忘れちゃいましたねえ」
目玉探偵A「そこは聞いとこうよ」
目玉探偵B「しかしもう眠ってしまっていますから」
目玉探偵A「それもそうだな」
担任教師「あの」
目玉探偵B「はい？」
担任教師「何をしているんですか？」

目玉探偵B「ああ、ちょっと探し物を」
担任教師「何をお探しですか授業中に？」
目玉探偵B「あ、いやあ、そのお、ちょっとしたものをね」
担任教師「どんなものですか？」
目玉探偵B「これくらいだと思うんですけどね、丸くて、転がるような」
担任教師「まったくもう授業中に・・・それ何色ですか？」
目玉探偵B「おそらく乳白色で、真ん中がこう黒色あるいは茶褐色、あ、瞳の色聞くのも忘れてますよ」
担任教師「目玉、ですか？」
目玉探偵B「そうですそうです」
担任教師「何でそんなものが？」
と言って担任教師も探していると他の生徒たちも一緒になって探し出す。と、目玉探偵Cが私をそおっと起こして、別の生徒にすり替える。川の女と一緒に自分のデスクに呼ぶ。担任教師と目玉探偵AとB、生徒たちは気付かずまだまだ目玉を探している。

ソーダの話

目玉探偵C「目玉をなくしたのは君か」
私「さあ、こうしてあるにはあるんですが」
目玉探偵C「ほら、やっぱり目玉をなくしている。ね」
川の女「はい」
目玉探偵C「はっきり言うとね、あんなやり口じゃ駄目なんだ。見てみろよ、あれじゃあまるで干潟で遊んでいるのと同じだぜ。いや実際あいつら干潟にいるよ。見てご覧。ほら。小さな貝を見つけ出して喜んでいる」
私「あら、本当。みんな海辺にいるみたい」
C「あいつらはすぐにああいうことになるんだよ。目的を見失う。呑まれっちまうんだその時の気分に。そもそも何をしていたのかを忘れてしまう。それでいつまでも見つからずにふらふらやってるんだ。あの秘書の目玉を探してもうどれだけ過ぎたかわからんぜ」
私「そうなんですか」
C「わかってないんだ。どうやって探せばいいものなのか。単純に転がっているものでもないんだ。しっかりした道筋がなけりゃ決して見つからない。だから僕みたいなプロフェッショナルがいるんだからね。飲むかい？」
私「何ですかそれ？」
謎郎「何と言うか、つまりはソーダだよ」
川の女「喉渇いちゃった。いただくわ」

C「ああ。飲みたまえ。君はどうする？」
私「じゃあ少しだけ」
ソーダを飲む。かなりの炭酸。飲み干すと、目玉探偵Cが物欲しそうにこちらを見ている。
私「え？何ですか？」
C「いやいやいや、え？」
川の女「何ですか？」
C「ここ笑うところだろう」
川の女「え？何処がですか？何処だろう？」
私「わかんないけど」
C「それだよ。ソーダだよ。ソーダに決まってるだろう。口の中で、しゅわしゅわしたろう？」
私「はあ」
C「つまり、口の中が騒いだだろう。だから、口の中で驚いたわけだろう。スピードがさ、全然こっちのこの飲んでるこの外側に対して口の中で起こっているそれこそ大変な驚きというか騒ぎとの大いなるギャップだよ。面白いだろう、だって」
私「いや、私はあんまり」
川の女「言ってることはわからないでもないですけど」
C「そう、わかるだろう」
川の女「いや」
C「ソーダはさ、コミュニケーションの入口だろう。ソーダってのはつまり笑いでしょう。だから僕はいつも持ち歩くよ。誰かと新しく出逢ったら、その時はソーダだ。だって口の中が面白いだろう、外は大したことないのに。笑えるよ。ギャップが。そうだろう」
私「そうですね」
C「そうだよ。笑えるよ。僕はおかしい。君は？」
川の女「おかしいと思う」
C「そう。そうだろう。それでいいんだ」

捜索の始まり。本名禁止と夏カレー

C「さて、何処から始めるか。やあ、一部くれないか」
と目玉探偵Cは女生徒を追いかける新聞配達人から新聞を一部買う。息を切らしている女生徒に聞く。
私「あなたは何をしているの？」
逃げる女生徒「何って見たらわかるでしょう」
私「わからないから聞いているのよ」

逃げる女生徒「見ての通り、逃亡しているのよ？」
私「何から？」
逃げる女生徒「現実からよ」
私「けどそこまで詰まっているのかしらあの中に」
逃げる女生徒「どうかしら。だけど他に思いつかないのよ。来たわ」
再び走り始める女生徒と追う新聞配達人。絶望的な等間隔を保ちながらもたもたと走り去る。
私「あの新聞屋さんも諦めたらいいのに」
川の女「きっとあの人にも事情があるのよ。次に会った時に聞いてみましょう」
目玉探偵Cは熱心に新聞を読んでいる。
私「何が書いてあるの？」
C「なに、大したことは書いちゃないさ」
私「それにしてはまた熱心に」
C「ところで腹が減らないか？」
川の女「そう言われてみれば」
C「そうだろう。君はどうだい？」
私「ソーダ頂いたんで、そんなにはあれですけど」
C「夏カレーの美味い店が在るんだ」
私「カレーはちょっと」
C「大丈夫大丈夫、基本喫茶店だからナポリタンとかサンドイッチとかそんなのも出来る店らしいから」
私「探偵さんの知ってる店じゃないんですか？」
C「あ、謎郎ね」
私「え？」
C「謎郎っていうんだ」
川の女「名前よ」
私「ああ、謎郎さん。へえ。あ、私は朝・・・」
謎郎「本名は駄目だよ」
私「え？」
謎郎「ここじゃ本名じゃ駄目だ」
私「どうして？」
謎郎「だって鈍るだろう。感性に邪魔が入るからさ。何か新しい名前をつけるといい。どうする？」
私「そんな急に言われても」
謎郎「互いに名前を付け合うっていうのも悪くない」
私「そういえば、あなたの名前も私知らない」
川の女「当ててみて」

私「・・・雲。ふわふわしてて雲みたいだから。美しいに雲と書いて美雲」
美雲「いいわ。私は美雲ね。じゃあ私の番ね。そう・・・」
謎郎「ねえ、メクライさんにしよう」
私「え！？」
謎郎「目玉を無くしている感じが凄く出てて面白いだろう」
私「ちょっとそんなの待ってよ。なんだかあんまりな名前じゃない」
謎郎「だけど面白いよ。面白いよね」
美雲「面白いは面白いけど」
謎郎「じゃ決定ね」
メクライ「だけどなんだかその目玉を食べちゃっているような感じもしない？」
謎郎「違うよ、だって食べるのは夏カレーだろう。すいません、夏カレー1つ。美雲とメクライさんは？」
メクライ「いやいや」
美雲「じゃあ、ナポリタンを」
メクライ「じゃあ私もナポリタンでいいけど、でも」
店員「ワン夏カレーとナポツー」
美雲「結構古い感じの店なんですね」
謎郎「夏カレーの夏が抜群だそうだよ」
美雲「夏カレーの夏って何なんですか？」
謎郎「いや、だから夏特製のさ、暑さだろう。辛いんだよ」
メクライ「あら」
美雲「どうしたの？」
メクライ「今って夏だったかしらと思って」
謎郎「少なくとも夏カレーを出しているこの店にいる以上は夏だろう。それに見てご覧よ」
メクライ「やだゴキブリ」
謎郎「下が中華料理屋だからね、仕方ないのさ夏だから。鞄持っていたらちゃんと口を閉めとかないと後でぞろりなんてこともあるからね」
メクライ「やめてくださいよ」
美雲「鞄ないから大丈夫よ」
謎郎「うん。それなら安心だ」
若き映画監督「メクライさん、ああ、やっぱりここにいた。考えてみたら待ち合わせ場所もはっきりとは決めずにいたからさ、不安になっちゃったよ」
メクライ「え？」
謎郎「そう、君に話しかけているんだよ。ここにはメクライって君しかいないよ」
メクライ「え？えっと・・・」
若き映画監督「ここ坐っていい？」

謎郎「勿論どうぞ」
若き映画監督「いやいや、しかし中国語はきついわ。俺と同じで、出欠厳しくなるって噂出回った途端にわらわらと何処からともなく来たわ来たわ。312の教室がパンパンになって2、3人窓から落ちてったよ実際。何頼んだの？」
美雲「ナポリタン」
若き映画監督「お、ナポリタンですか。俺どうしようかな。じゃあ夏カレー」
謎郎「ほらやっぱり夏カレーだよ」
若き映画監督「で、考えてくれた？」
メクライ「え？」
若き映画監督「いや、ほら映画の件。この間話した無声映画。レストランの話の」
メクライ「ああっと」
美雲「どうして敢えて無声映画なんですか？」
若き映画監督「いや、別にどうってこともないんだけどね。要は『ふくろうの河』みたいなことだから、あんまり語りすぎるとSFみたいになっちゃうでしょ。だからシンプルに台詞をなくすことで映画的リアリズムみたいなものを出したいと思ったわけよ。オケ入ってる子に頼んで弦楽入れようかと思ってるんだけどさ。ほら包丁やらフライパンやら投げつけて来るシェフから何とか逃れて街に飛び出すとことかさ」
美雲「でもどうして経験もないのに？」
謎郎「惚れてんだろう？」
若き映画監督「いや、あんまりほら芝居やってるとかっていうんだと感じ違っちゃうかなあと思って。あれは繰り返しの中で探求していっている関係値でしょ。日常的とは言えないっていうかさ。どうも仰々しくなるのが嫌でね。そしたら何かほら、メクライさんモデルみたいなこともしてるっていうからさ」
メクライ「私が？」
美雲「読書モデルですよ。ほんの数回、頼まれてやっただけで」
若き映画監督「でも良かったよ。いや、実際映研にゃ当然の如くそんな素材いないし、キャンパスの中でこう見渡してもなかなかこうしっくり来ないというところもあって、凡庸というか平俗というか、ありきたりでね。それでちょっと思い切って、お声をお掛けしたという」
メクライ「この人誰ですか？」
謎郎「僕は知らないよ。君の心当たりを追いかけているんだろう」
メクライ「だってこの人、大学通ってるっぽくない？」
美雲「大学生の頃の記憶なんじゃないの？」
メクライ「記憶ってまだ大学生になってないし」
謎郎「すると夢の中の出来事なのか。まあいずれにしても、そうなってくると頼るべきものは直感か」
メクライ「だけどモデルなんかしてません。することもないだろうし」

美雲「でもするかもしれないし、したかもしれないでしょう」
店員「夏カレーとナポお待たせしました」
謎郎「しかしこうして彼はしたと言っているのだから、あるいはしたのかもしれないよ。そしてこうして自主映画に誘われて、ひょっとすると主演を飾ってインディース映画の賞を取るなんてことだって有り得ないとも限らんのだから」
若き映画監督「そう、まさしくコンペに出したいと思ってるんだ。結局複雑になり過ぎてるんだよ最近のインディースはさ。手法もストーリーも本来の、ほら前に貸したフランク・キャプラみたいなさ、ああいう真っ直ぐさを恐れ過ぎてるっていうかさ。だから上手くすればこのアイデアはいけるかもって、スタッフも乗り気になってくれてるんだよ」
謎郎は新聞読みつつ食べつつ「この人、これで結構モテるんじゃないかな」
美雲「少し軽々しいような気もするけれど」
謎郎「どうするの？やるの？」
若き映画監督「頼むよメクライさん」
メクライ「はあ」
謎郎「で、結局のところはどうなったの？」
若き映画監督、暗さを纏って「結局途中で頓挫しましたよ。予算がとにかく予想以上に掛かるわ、カメラのトラブルは続くわで」
謎郎「けれどメクライくんとの関係は進展したんだろう？つまり君は、映画出演ということ以上に、そもそもメクライくんに興味があったんだろう？」
謎郎「いやそれは・・・」
メクライ「そうだったの？」
美雲「そうよ」
若き映画監督「いや・・・・」
謎郎「芸術に託(かこ)つけてたらし込もうって魂胆だったと白状したまい」
若き映画監督「それは違う！」
謎郎「しかし脚本にそもそもないシーンを次々現場で撮り足して、ありゃあ映画作りというよりは殆ど求愛行為じゃなかったのかね？」
若き映画監督「違う。あれは本当に必要だと思って・・・」
謎郎「予算にしたって問題はこうした君のフィルムの無駄遣いにあったとしか言いようがないね。あれだけ良い映画にしようってこっちをけしかけておいて、それはあんまりだったんじゃないのかな。どう思う？」
美雲「私は撮ったシーンに関しては後悔ないけど」
謎郎「おいおいとんでもないぜ。あんなもん公然わいせつだよ。2人して花畑でふにゃふにゃすんのも、ノルウェーのポルノ映画の香りがぷんぷんしてさ、ハリー・リームスでも出てくんじゃないかって思ったくらいだよ」

美雲「バタフライズならスウェーデン映画だけど」
謎郎「ハリー・リームスってユダヤ人なんだぜ」
若き映画監督「いや、本当、やりたいことはやろうとしたんだよ」
謎郎「だからそれはメクライさんとやっちゃいたかったってことでしょ？」
美雲「ちょっと謎郎先輩言い過ぎだよ、本人の前で」
謎郎「だってこっちも持ち出してんだから当然のことだろう」
美雲「じゃなくってメクライさん」
謎郎「ああ、メクライさんね。いや、もうメクライさんも可愛いんだけどさ、本当もうそれだけでさ、大根芝居で見てらんないんだよね」
美雲「ちょっと」
謎郎「いやもうこの際いいでしょ、完全に頓挫しちゃったわけだし。コンペの締切りもがっつり過ぎてしまった訳ですから。読者モデルだか何だか知らないけど、全編張り付いたような笑顔でいられたって堪んないんだよ。美雲くんもそう思ってたんじゃないの？」
美雲「そうって」
謎郎「だから」
美雲「別に」
謎郎「おい、だって撮影帰りに言ってたじゃん」
若き映画監督「ちょっともういい加減にしてくんないかな」
謎郎「おう何だ何だ？開き直るのか？」
若き映画監督「メクライくんは凄く良かったじゃん。良かったよメクライくん。君は本当に凄く良かった。感激したよ僕は。またやりたいと思った。本当に。本当にごめんね」
メクライ「いいよ。あたしも、楽しかったし。いいのいいの、本当に」
謎郎「ほらだからもうこういうことでしょ。2人の世界なんでしょ。いいよいいよ。もう行こう。ね。駅前のつぼ八で呑もう。そうしよう。監督とメクライさん2人でいい思い出にして」
メクライ「でも」
謎郎「もういいいって。はいじゃあ、行く人？」
美雲「じゃあメクライさん、また電話して」
謎郎と美雲、それからわらわらと集まっていた自主映画の人たちが呑みに行く。残るのは若き映画監督とメクライ。
若き映画監督「本当に申し訳ない」
メクライ「ううん」
若き映画監督「あのさ」
メクライ「うん」
若き映画監督「本当にごめんね」

メクライ「ううん。楽しかったし」
若き映画監督「もうメクライさん、凄い良くて、それでもう気がついたら凄い回しちゃってて。もう本当自分のそういうとこ、反省するっていうか、情けない、みんなに申し訳ない、メクライさんにも本当に申し訳ない」
メクライ「そんな、もういいって。仕方ないよ」
若き映画監督「メクライさん、俺ら付き合う？」
メクライ「え？」
若き映画監督「付き合わない？」
メクライ「ああ・・・」
若き映画監督「付き合わないか、付き合わないよな」
メクライ「いや、え、本気なの？」
若き映画監督「いや本気だよ。いつも本気だよ俺はいつも」
メクライ「・・・じゃあ、別に、いいけど」
若き映画監督「あ、そうなんだ。ああ、よかった」
メクライ「うん」
若き映画監督「え？今日はこれから何かあんの？」
メクライ「え？どうして？あ、みんなと？」
若き映画監督「いやいやいや、そうじゃなくって。え？なんか」
メクライ「あ、どうしようかな」
父「おい飯だぞ」
メクライ「え？」
父「飯、食わないのか？」
メクライなのか朝緒なのか「ああ、うん。あ、ごめんなさい、ちょっと今日は帰るね」
若き映画監督「え？え？何で？」
父「飯だぞ」
メクライなのか朝緒なのか「ごめんね」
若き映画監督「いやいや、え？」
父「朝緒、朝緒、朝緒」
朝緒らしきメクライ「ごめんなさい」
若き映画監督「あ、じゃ電話するわ。付き合うんだよね」
朝緒らしいメクライ「うん」
父「朝緒」
朝緒らしきメク「はいはい」
若き映画監督「じゃキスしておこう」
朝緒らしきメクライ「え？キス？」
若き映画監督「ああ。キスしておこう」
朝緒らしきメクライ「え、じゃ、いいけど」

若き映画監督は朝緒とキス。若き映画監督のどん欲なキスは、やはりまだうら若きメクライの性欲をも呼び起こしかけたところで父が呼ぶ。
父「朝緒！」
朝緒メク「はい！ごめんね、じゃあ」
若き映画監督「うう」

父、娘を追う

母「あんたぼーっとしてるけど、大丈夫？」
朝緒「大丈夫だよ」
母「お腹空いてないの？」
朝緒「ああ、そんなには」
父「外で食べるんだったらお母さんにちゃんと言えよ」
朝緒「うん」
母「まあ仕事してるしね、あんなこともあったんだし、色々あるんだろうけど」
朝緒「あんなことって？」
母「玲音ちゃんのこととか」
朝緒「・・・ああ」
父「どうなんだ？」
朝緒「何が？」
父「いつまで続けんだ？」
朝緒「え？」
父「いつまでも続ける、ダイケーマート」
朝緒「わかんないよ」
父「お父さんはあんまり好きじゃないな」
朝緒「何が？」
父「あれ出来て商店街がどんだけ酷い目に遭ってるかお前知ってるのか」
母「ちょっと」
朝緒「またそれ」
父「元値で売っても太刀打ち出来んような状態だ。体育着と上履きやってなきゃとっくに倉田や菊池んとこみたいにやられちゃってるよ」
母「もういいじゃないですか。朝緒、果物食べる？」
父「今日も佐藤くんから電話あったぞ」
母「お父さん」
父「いつまでここにいるつもりなんだ？御近所でもお前があそこで働き始めたこと噂になってんだぞ」

母「お父さんってば。いいんだよ、好きなだけいれば。お父さんはあんたがダイケーで働いてて寂しいだけなんだから。店手伝って欲しかっただけなのよ」
父「あんな阿漕な商売したら後で大変なことになる。勿論それもある。だが俺が言ってるのは佐藤くんのことだ」
母「ねえもうお父さん飲み過ぎよ」
父「一滴も呑んでない」
母「そうですけど」
父「佐藤くんに今電話しなさい」
朝緒「・・・今って」
父「電話しなさい」
朝緒「・・・」
朝緒は部屋に。
父「朝緒！待ちなさい！朝緒！」
目玉探偵B「たくさん取れましたね」
目玉探偵A「ああ、味噌汁にするとだいぶいいね」
緑秘書「だけど何だか物足りないような気もするわ」
目玉探偵B「こんだけ取れたのに？そりゃあ緑さんね、欲張りですよ」
目玉探偵A「そういうとこあるんだよ緑くんは」
緑秘書「そうじゃなくって、だって物足りなくありません？」
目玉探偵B「そんなわけないよ。だって緑さんこれだけ採れたんですよ、ねえ先生」
担任教師「いやあ、それが私も何だか夢中で貝を拾ってしまっていて、いまいち整理がつかずにいたところなんですよ」
目玉探偵B「整理がつかないって先生みたいな偉い人に言われると自信を失ってくるような、どうなんでしたっけねえ？」
目玉探偵A「うん、先生を見ていたら少し道草を食ってしまったような気もして来たな。しかし味噌汁にしてしまえばそんな疑問も取り払えるんではなかろうかと」
目玉探偵B「なるほど。そりゃそうかもしれない」
担任教師「とにかく湯を沸かすところから始めてみますか」
緑秘書「あら、あそこにほら」
目玉探偵B「あれ？ちょっとほら、あれ」
目玉探偵A「ん？あれ？」
担任教師「おいメクライじゃないか。どうした？」
メクライ「あれ？先生こそ何してるんですか？」
AとBと緑秘書は自分たちがすっかり依頼主、つまり朝緒と思い込んで一緒にいた見知らぬ女を見つめている。
担任教師「先生はみんなと一緒に潮干狩りを」
メクライ「まあ先生あのままこの人たちと貝採っちゃってたんですか？」

担任教師「うん、アサリをね。沢山採れたぞ。でもなんだかおかしいよな」
メクライ「おかしいと思う」
担任教師「うん。メクライこそ1人で何してる？玲音は一緒じゃないのか」
メクライ「玲音」
担任教師「いつも一緒だろう」
メクライ「いつも一緒だったかしら」
目玉探偵B「ともかくその玲音さんを探しつつ、まずはこれを味噌汁にしてしまいましょうか」
目玉探偵A「玲音さんを探しつつ？」
目玉探偵B「そうですよ。だってそうでしょう」
目玉探偵A「まあそうか」
目玉探偵B「ね、そうしましょう」
緑秘書「これだけあれば酒蒸しも出来ますね」
歩き出しつつ目玉探偵A「ああ。少し小振りだけど、それもいいかもしれないな」
歩き出しつつ緑秘書「きっと良い出汁出ますね」
歩き出しつつ目玉探偵B「君は誰なのかな？」
紛れた女「さあ紛れてしまって」
目玉探偵B「玲音さん？」
紛れた女「違います」
目玉探偵A「じゃあもうお家に帰りなさい」
紛れた女「はあ」
わらわらと行ってしまう。朝緒も教師も。じっと見ていた父だが食卓に戻る。
母「朝緒は？」
父「うん。部屋にいる」
母「そう」
父「しかし時折あいつがいるのかいないのかわからなくなるようなことがあるよ」
母「怖いこと言わないでくださいよ」
父「うん」
母「お父さんはだってそこにいるんでしょう？」
父「俺はここにいるよ」
母「だったらあの子だって部屋にいるでしょう」
父「そうか」
母「そうですよ」
父「そうだよな」
母「あれからですか？」
父「何が？」
母「そんなことを思うようになったのは」

父「いやあわからんな。そうかもしれんし、葬式の時からかもしれないし」
母「葬式ってどっちの？」
父「・・・」
母「いずれにしても」
父「佐藤くんにまた明日にでも」
母「そうですかねえ」
父「それが一番いいんだ」
田端「あのお」
父「誰かいるぞ」
母「あら、えーっと」
田端「どうも迷ってしまって」
父「迷って家の中に？」
田端「あ、ここ、あ、すいません」
父「いやいや、いいんですけども、家の中にまで迷い込んでくるっていうのは君」
母「朝緒のお友達の方ですよね？えーと」
田端「田端です」
母「そう田端さん。お茶でもいかが？」
田端「あ、お構いなく」
父「しかし何処をどう歩いて我が家に迷い込んだというんですか？」
田端「それが、朝緒さんと玲音さんと授業の後、何かを探すだか探さないだかで探偵さんの処に行こうってなって、そしたら夕闇が何だか凄くって、なんだかこんな見渡す限りのような処があったのかって思って、そしたらそのままふらふらと」
父「我が家は夕闇の中か」
母「でもお父さん、玲音ちゃんって」
父「なに、この子も少し疲れてるのさ・・・ああいうことの後では、そういうこともあるだろう。とにかく朝緒は部屋にいますんで。呼びましょうか」
母「そうね。朝緒、朝緒、朝緒、あらおかしいわね。朝緒」
父「見ておいで」
母「ええ」
母は朝緒を呼びに行く。
田端「何だかすいません」
父「いやいや。それよりえーっと」
田端「田端です」
父「そう、田端さん。田端さんは何を探していたんですか？」
田端「それが何だったのか。朝緒さんは何かそれがないとやばいみたいなことを言っていたけれど」
父「ふむ。で、授業中というのは？」

田端「高校の。担任の上野先生の授業です、あの先生の授業は何て言うか抽象的って言うか。さっきも何か、そもそもわかっているつもりでいても、それが何かと問われると途端に不安になってわからなくなってしまうようなものとは何かだなんて。わかんないですよね」
父「わかっているつもりでいても、それが何かと問われると途端にわからなくなってしまうもの」
田端「わかります？」
父「いやいや、私みたいな文房具屋にはとてもとても。しかしその上野って担任の先生は、朝緒も高校の頃に何度か口にしていたような気がしますな。面白いって」
田端「高校の頃？」
父「ええ。（ふと不安になったのか胸をさする）」
田端「どうしたんですか？」
父「いやナニ、ちょっと」
田端「朝緒さん、もう帰って寝ちゃってたのか」
父「おい、おい母さん」
返事はない。
父「良かったら見に行きますか」
田端「いいんですか」
父「ええ」と上着を羽織る。
田端「どうして上着を着るんです？」
父「あ、ああ、いや、わからない。何となく着てしまったみたいで」
田端「おかしい。家の中なのに。何処かへ出掛けるみたいに」
父「まったくだ。しかし何となく、すぐには帰れないような気がしたものでね。そうだ、少し持って行きましょうか」
田端「持って行くって何をです？」
父は台所へ入って行く。田端はついていく。

夕闇とメクライ代行

玲音が歩いている。
玲音「どこまで続くのかしら、この夕闇。それとも夜が明けようとしているの」
座り込む玲音。緑秘書がやってくる。
緑秘書「あらこんなところに」
玲音「疲れちゃったのよ」
緑秘書「へえ」
玲音「誰もいないみたいね、ここから向こうは」
緑秘書「そうですね、実際そうかもしれないし」

玲音「何処へ行くところ？」
緑秘書「お米を買いに行くんですよ。アサリがたくさん採れたものだから、お味噌汁を炊いていたら、ご飯も食べたくなってきたねって。ほら、確かあっちにスーパーがあったでしょう。朝緒さんの働いている」
玲音「へえ。私は行ったことがないけれど」
緑秘書「なんだかとても大きなスーパーでとても安いんですって」
玲音「そう」
緑秘書「一緒に買いに行きますか？朝緒さんもいるかもしれないし。まあさっきまで一緒にいたからいないかもしれないけれど。あなた、迷ってしまったんでしょう？」
玲音「やめておくわ」
緑秘書「あら、まだ気を悪くしているんですか、仲間はずれにされたこと」
玲音「仲間はずれにされたわけじゃないわ。私が自分で飛び出しただけ」
緑秘書「一緒に行けば楽しかったのに」
玲音「へえ」
緑秘書「潮干狩り」
玲音「潮干狩り？」
緑秘書「潮干狩りですよ」
玲音「潮干狩りだったかしら」
緑秘書「潮干狩りですよ」
玲音「こうしてどんどん潮干狩りが力を持って行く」
緑秘書「まあ、おもしろい。何かの台詞？」
玲音「違うと思うけど。何となく」
緑秘書「どうしてこんな何もないところに」
玲音「わからないわ。ただ疲れてしまったの」
緑秘書「やっぱり行きませんか、新しい格安スーパー」
玲音「やめておくわ。授業に戻ろうかと思ってるの。どっちかわかる？」
緑秘書「さあ。あ、ただこの先に七叉路がありますよ」
玲音「七叉路」
緑秘書「そのうちの一本だけは思った通りの好きなところへ行ける通りなんですって、噂ですけど」
玲音「なんだか怖いわね」
緑秘書「そう怖くて。だから私もその七叉路を避けるように避けるように。あ、いけない。待ちぼうけを食わせてしまうとうるさいから行きますね」
玲音「そうね」
緑秘書「では御機嫌よう」
玲音「どうも」
緑秘書「七叉路に出たら気をつけて」

玲音は依然目の前を覆う無人の夕闇を前にまだ動かずにいる。
若き映画監督が若い女とやってくる。若き映画監督は既に若きそれではなく、澱みを纏っている。若い女は恋に落ちたカビリアのような無垢な瞳の。澱んだ映画監督はカビリアに囁くと、カビリアはもちろん陽気に頷いて「あっちで待ってるわ」と言っているのか。澱んだ映画監督は玲音を意識しつつ離れたところに坐る。謎郎と美雲がやってくるが、ただならぬ空気に足を止める。謎郎は新聞配達人から新聞を買って、急いで読みつつ2人を見る。
澱んだ映画監督「ひさしぶり」
玲音「・・・・」
澱んだ映画監督「元気？」
玲音「わかんないけど、どうして？」
澱んだ映画監督「元気には見えないからかな」
玲音「元気じゃなさそうだねってこと」
澱んだ映画監督「うん。元気じゃなさそうだねってことかもしれない」
玲音「で、何？」
澱んだ映画監督「最近どうしてんの？」
玲音「何もしてない」
澱んだ映画監督「何もしてないんだ。え？モデルとか映画とかは？」
玲音「してない」
澱んだ映画監督「してないんだ」
玲音「してない。先輩は？」
澱んだ映画監督「俺もしてない」
玲音「してないよね」
澱んだ男「してないしてない。今は何か友達と店やったり」
玲音「へえ。やりそう」
澱んだ男「何それ。まあいいか。しかしメクライと会うのいつぶりだろうね」
メクライ「先輩が映画資金ってお金持って出てったきりじゃない」
澱んだ男「ええ、そうだっけ」
メクライ「そうだよ」
謎郎「これあの続きだ、さっきのほら映画の」
美雲「でもどういうこと？」
謎郎「だから代行さ」
美雲「代行？でもそんなこと」
謎郎「有り得るさ。つまりメクライくんとあの彼女の友情が結ぶような。」
美雲「そうね。うん。あるかもしれない。かもしれないのよ。かもしれないことだらけなんだから世の中は」
謎郎「そう。さすが、君は知っているね。まさにその通りなんだ」

メクライ「今日はどうしたの？女の子連れて」
謎郎「女の子？あ、この子だ」
メクライ「そう、あの子」
澱んだ男「別にあれは何でもないんだよ」
カビリア「あたしは何でもないんです」
メクライ「何でもないんだ」
カビリア「何でもないです」
メクライは石を投げる。
カビリア「え、何！？」
澱んだ男「何すんだよ」
メクライ「だって何でもないんでしょう」
澱んだ男「何でもないからって石投げんなよ」
メクライ「ねえねえ」
澱んだ男「何だよ」
メクライ「お金返せる？」
澱んだ男「返すよ、そんな金。いくら？」
メクライ「５０万」
澱んだ男「お、そんなだっけか」
メクライ「返せないなら謝って」
澱んだ男「謝ったらいいの？」
メクライ「うん、でも全部謝ってね」
澱んだ男「全部って？」
メクライ「全部よ全部」
澱んだ男「全部って言われてもわかんないだろ」
メクライ「忘れちゃってるんだね」
澱んだ男「何が？」
メクライ「何でも無いあなたも気をつけなさいね。この人、興奮するだろって撮ってるビデオ、友達に回すからね、お金取って」
澱んだ男「おい何言ってんだよ」
メクライ「あれ相当出回って大学やめたのよ」
澱んだ男「あ、そうなんだ」
メクライ「あ、そうなんだ？」
澱んだ男「悪かったわ。でも俺もうしてないよ。してないよな」
カビリア「わかんないけど」
メクライ「わかんないって言ってるけど」
澱んだ男「もういいわ。話しかけたのが悪かったわ。そうだ、メクライのそういうねちっこい感じが苦手だったの思い出したわ」

メクライ「ねえ、私の話聞いてたの今？」
澱んだ男「聞いてるからこうして会話してんじゃないの、馬鹿なこと言って」
謎郎遠くから「殺す」
澱んだ男「は？何だお前」
謎郎まだ遠く「お前にソーダはやれない」
澱んだ男「何言ってんだ気持ち悪いな。もう行こう」
カビリア「うん・・・」
メクライ「謝らないの？」
澱んだ男「もう謝っただろう。聞いとけよ人の話」
謎郎遠くから「殺すぞ！」
澱んだ男「うるせ」
カビリア「何なの？」
澱んだ男「何でもない。行こ」
カビリア「オッケー」
謎郎は怒りで拳銃を取り出して澱んだ男の背中に向けると、美雲が驚いて止める。
美雲「駄目よそんなの！」と揉め合う。
しびれを切らして謎郎「本物じゃないから」
美雲「本物じゃないの？」
謎郎「本物じゃないさ」
美雲「本物じゃないなら」
謎郎は暫く銃を向けて、引き金をぐっとしたりしている。
美雲「音とかはしないのね」
謎郎「音はしない」
美雲「そう」
謎郎「だってそしたら殆ど本物と同じ結果を招くことになるだろう」
美雲「どういうこと？」
謎郎「つまり振り向いてさ。どちらかがそうなるってことさ」
美雲「そうかしら」
謎郎「とにかくこれはこうして仕舞っておこう」
美雲「大丈夫？」
メクライなのか玲音なのか「大丈夫よ」
謎郎は辺りを捜索する。
美雲「どうしたの？」
謎郎「可能性高いよ、メクライくんの目玉さ」
美雲「そうかしら」

謎郎探しつつ「しかしよりにもよって酷い代行じゃないか。本人は何処で何をしてるんだ？とんでもないところを友達に代わってもらって。こんなことならつぼ八なんか行かなきゃよかった」
美雲「言い出したのは謎郎さんでしょう」
謎郎「言い出したのが僕だからこうして後悔しているんじゃないか。しかし君はよくやってくれたよ。よどみなく、見事にやってのけてくれた。友情だな。だって友情だろう」
玲音「ねえ」
美雲／謎郎「はい」
玲音「あなた誰なの？」
謎郎「え？」
美雲「私？私は美雲よ」
謎郎「あ、メクライくん、何処へ行っていたんだ」
メクライが息を切らしてやってくる。立ち止まり、玲音と再会。2人は見つめ合い、しかし玲音は歩き出す。
メクライ「何処行くの？」
玲音「授業に戻るのよ」
謎郎「メクライくん、彼女は君の代わりに」
メクライ「あいつと遭ったのね」
謎郎「そう。そうなんだよ」
メクライ「・・・」
謎郎、メクライを気遣って、しかしどうしようもなく「そうなんだ」

担任教師は再び語り、父と田端は母さんのおしんこを食べる

上野「何の話をしていましたか・・・何か大切なことをお話していたような気がするのですが、それがどういうわけか思い出せずにいます。私としたことが・・・貝の話をしていましたね。そうですよね。そうですね。いえいえ、そうです。貝です。アサリです。アサリの物足りなさ。あれだけ採れたのに、この物足りなさは何だということでした。それでこれは今思い出したんですが、昔、潮干狩りをしていた時に、向こうの方でボートが見えたんです。すると何かを捨てている。おいおいこっちは後で食べる事も含めて潮干狩りとして楽しんでいるところに、ゴミを捨てるとは何事だと、私はすぐに家族にそのことを伝えようと、ばしゃばしゃと走って、すっかり潮干狩りを楽しんでしまっている家族を呼びました。家族はみんな笑顔でこっちに向かって来ます。きっと私の足下に驚くほどアサリがあるのだと思い込んでいるんです。違うのに。この海は汚れている可能性があるということなのに。ふっともう一度ボートを見ると、ボートは少し離れたところに浮かんで、またしてもゴミを、いや、ゴミじゃない。アサリ

だ。アサリなんです。アサリをね、撒いてくれているんです波に乗って潮干狩りを楽しむ僕らに届くように。私は家族にこのことを伝える事が出来ませんでした。やってきた家族に、私は、足下を指差して、ここ凄いよ、とだけ言いました。確かにアサリは、あのボートの人たちが撒いてくれたアサリは、波に乗って、たくさん僕の足下にあったのです。どうしようもなくつまらないような気持ちになった僕は、可愛らしい笑顔で大きなアサリを見せる血のつながらない妹の顔を、そんなわけないだろと、尖ったスコップでこうやりました。妹は意味がよくわからないような顔をしていました。頬から唇の下迄ばっくりと切れてしまったのに、まだ笑顔が残ったままでした。それがおっかしてくて、思わず吹き出して笑っていたら、あの男に本当に死ぬんじゃないのかと思うくらい殴られました。これは時折夢にも見ます。それでその夢が夢ではなく現実かもしれない思ったらすぐに、あのアサリを撒くボートへの鈍痛に似た苛立ちのようなもののはけ口は、可愛い妹の笑顔にではなく、あの男の喉仏に斬りつけてやるべきなんだと思い直し、とにかくスコップをこう持って、あの男のところへ走れば走る程、母と男は僕から遠ざかり、男は公衆の面前で母の水着を脱がせて犯そうとしている、母はどっちとも言えないような顔をして笑い、ああそうか、母も楽にしてあげねばと、しかし僕はといえばまるでその場をただ行進するような愚かさでばしゃばしゃと、ばしゃばしゃばしゃばしゃ、そのばしゃばしゃの僕の無様をまた妹が貝を持ってニコニコ見つめるので、結局また妹を・・・つまりわかりましたか。この物足りなさが。この物足りなさは、つまりスコップを探しているんですね。スコップの無いことです。もしものために」

田端「先生。お父さん、上野先生よ」

父「ああ、確かに、以前お会いしたこともあるような。いや写真で拝見しただけですかな」

上野青ざめて。

田端「先生どうしたの？具合悪いの？」

上野「スコップどうした？」

田端「はい？」

上野「スコップだよスコップ」

田端「スコップ持ってないですけど」

上野「え？じゃあどうやってやってたんだよ」

田端「どうやってって何をですか？」

上野「じゃ熊手ないのか？」

田端「熊手？」

父「こういうやつですよ、熊手っていうのは」

田端「え？もう一回」

父「こういうやつです。こういう熊の爪みたいだから熊手っていう、縁を引き寄せるやつ」

田端「へえ持ってないです」
父「熊手は持ってないよね。先生、竹の定規ならあるかもしれませんよ」
上野「定規なんかじゃ駄目だ。ちょっと待ってろ。どっかから取って来るから。とにかくそこにいろ。な」
上野はばしゃばしゃと去って行く。
上野「進める！進んでるぞ！」
田端「やだお父さん、足下びしょびしょ」
父「本当だいつの間にかここは干潟か」
田端「潮干狩りのことかしら」
父「え？」
田端「そうですよきっと先生が言っていたのは潮干狩り。きっとここに沢山貝があるんですよ。そうじゃないかしら。やっぱり。ほらアサリがこんなに」
父「いや田端さん、ここは私の家ですよ」
田端「え？だけど」
父「確かに今はどういうわけか浅瀬にいます。しかし私たちは我が家の居間から廊下を出て、朝緒の部屋に向かっている途中にいるんですよ」
田端「そうでしたっけ？」
父「そうですよ」
田端「じゃあ先生も家の中に？」
父「とにかく廊下に戻りましょう」
田端「だけど岸辺はあんなに遠く」
父「いやいやきっと歩けばすぐですよ。しかし、これは何だか様子が変だ。とにかく田端さん、しっかり正気を持って」
田端「はい」
父「目的をはっきりすることだ。君の、田端さんの目的は？」
田端「目的・・・」
父「どうしました」
田端「この沢山のアサリを前に、潮干狩りへの興味が物凄い力で私を招き寄せていて。あのう、一緒に潮干狩りに来た私のお父さんではないですよね？」
父「違う違う。私は朝緒の父親です。しっかりなさい。私の目的は朝緒です。朝緒にしっかりとご飯を食べさせて、中途半端に始めたパートをやめさせて、帰るべき夫の元へ帰るよう母さんと一緒に説得すること。君は？」
田端「私は、」
父「うん」
田端「私は、私は、私は、」
父「わかったわかった。いいですよ。それなら私の目的に乗っかりなさい。少しは安全だ」

田端「はい」
父「これ」と父はタッパのおしんこを渡す。
田端「おしんこ」
父「食べなさい。母さんが浸けたんだ」
田端齧って「おいしい」
父「うん、うまいんだ。この味をしっかり覚えておくんです。そしたら少なくともこの地点にまでは戻って来れるはずです」
田端「はい」
父「行きましょう。この錯綜から、朝緒と、母さんを探しに」
目玉探偵B「こんにちは」
父は無視してばしゃばしゃ歩く。
田端「挨拶してますけど」
父「不可解なものとは向き合わないことです」
田端「はい」とばしゃばしゃ続く。

教育の為、行動に出る目玉探偵と緑秘書

目玉探偵B「なんだよ、挨拶も返さない」
目玉探偵A「時代だよ」
B「まともに挨拶も出来ない時代なんて」
緑秘書「あった。またアサリ」
A「アサリ？あ、足が」
B「うわこりゃあすごい」
緑秘書「ええ、こんなに沢山。どうします？採りますか」
A「うん。しかしどうだろう。あれだけ食べてまだ余っているくらいだろう」
B「確かにまだこうして」
緑秘書「そうですよね」
A「寧ろこうして駄目にしてしまってもあれだから、次に来る人のために撒いてしまうというのはどうだろう」
B「いいんですか、そんないいことして」
A「しかし誰にも見られないようにしなければいけないよ」
B「そりゃあそうですよ。例え善意であっても、自然とのふれあいを、夢を壊す訳にはいきません、緑さん、辺りをしっかり見回してくれたまい」
緑秘書「ええ。ぬかりなく」
B「いいですか？」
A「ああ、見ておこう」
緑秘書「異常なしです」

A「こちらも問題ない」
B「では」
Bはアサリを捨てる。勿論それを錆びたスコップを持った上野が見ている。
B「見られたような気がします」
A「ああ、見られていたのを見ていたよ」
緑秘書「どうして途中でやめてしまわなかったの？」
B「途中でやめてしまうと、寧ろいやらしさが増すような気がして」
緑秘書「途中でやめてしまえば、おっとっと、ということになるでしょう」
B「なりますかねえ、おっとっとってことに」
緑秘書「なるわよ。なりますよね」
A「しかしこの失敗談には学べることも多いかもしれない」
緑秘書「どんなことです？」
A「それは目撃した者にしかわからないよ」
B「じゃあ目撃者を失った以上何を学べたかどうかは藪の中ですね」
緑秘書「海の藻くずと消えたのよ」
B「え？そうかなあ。それだと目撃者の中からも消えてしまったようなサウンドですよ」
A「どちらも違うな。何を学べたかどうかはスコップの中だ」
B「スコップの中？」
A「目撃者はスコップを持っていただろう」
B「そういえば確かにスコップを」
A「あのスコップこそ、次に潮干狩する人のためにアサリを撒くという悲しき善意を目撃してしまったことから何を学べたかを示す最大のツールだ」
緑秘書「どうしてですか？」
A「つまりあのスコップの迷いだよ。迷いが出るだろう。アサリを求めるスコップにブレが生じる。アサリ採りたい、けどこれは自然との戯れでなはなく、不自然との戯れなのだよなあというブレがさ。このスコップに生じるブレこそが学びなのさ」
B「なるほど。じゃあそのスコップのブレを探しに行くんですね」
A「うん。しかし、それよりもここにあるアサリを拾って、もっと大々的にアサリを撒こう。誰にも彼にも見せるんじゃない。なるべくはしゃいでいる子供などにそおっと、しかし大胆に見せる。そうすればそこかしこでスコップのブレが、人生を生き抜く為のブレがそこかしこで生じるぞ」
B「めちゃめちゃ為になりそうですね」
A「いや、きっとなるさ」
緑秘書「でもどうでしょう」
A「お、緑くん反対意見か」

緑秘書「反対意見というわけじゃありませんけど、今のやり方のままじゃさほど大胆に犯行に及べるとは思えませんね」
A「完全にそれは間違いないね」
B「じゃあボートでも探しますか」
A「まったくもって賛成だね。緑くんは？」
緑秘書「有効だと思います」
A「うおし決まった」
ばしゃばしゃと歩き出す3人。
B「緑さんさっき犯行に及ぶって言ったのは」
A「言い間違えたんだよ。そうだろう」
緑秘書「言い間違えたんです。だって犯行だなんて」
B「ですよね。安心しました」
相変わらず絶望的な感覚を保ったままの新聞配達人と新聞配達人から逃れる女生徒が通り過ぎる。
緑秘書「こんにちは」
女生徒「こんちは」
B「こんにちは」
新聞配達人「おはようございます」
B「精が出ますな」挨拶を得て実に満足して歩く。

母の決断とメクライ疾走

新聞配達人たちは行ってしまい、目玉探偵ABと緑秘書もいなくなる。
母が迷い込んで来る。
新聞配達人の去った方角から恐らくは買ったばかりの新聞を読む謎郎と、美雲、朝緒がやってくる。足取りは重たい。会話もない。
朝緒「あ、お母さん」
見つめ合う朝緒と母。
音羽「お姉ちゃん来たの？」
母「え？」
音羽「来たんでしょお姉ちゃん」
母「ええ」
美雲は謎郎に「妹？」と聞くと謎郎曖昧に頷く。
母と音羽は朝緒に対峙するように厳格に坐る。朝緒はよくわからずにいるが、謎郎の視線を受け、坐る。
母「で？」
朝緒「で？」

母「いくら必要なの？」
メクライ「え？」
母「いくら必要なの？」
メクライ「ああ・・・」
母は封筒を差し出すと音羽「ちょっとお母さん」
母「いいのよ」
音羽「だってもうおかしいわよ」
母「いいの」
音羽「もう最悪だよ」
母「八十万入ってる」
メクライ「・・・」
母「でもねメクライ、お母さんもうこれで最後にして欲しい」
メクライ「・・・・」
母「何遍も何遍も同じこと繰り返して」
メクライ「私は・・・・」
母「施設だって勝手に抜け出して。あそこ入れるのにどれだけお父さんと私が苦労したかあんたわかってるの？馬鹿みたいにかかるんだよお金だって。お金ってね、あんたが思ってるような甘いもんじゃないんだよ」
メクライ「わかってるよ」
母「わかってないでしょ」
メクライ「わかってる」
母「わかってない」
メクライ「だったらお母さんだってわかってない」
母「私の何がわかってないの？」
メクライ「何にもわかってない」
音羽「お姉ちゃんちょっと何言ってんの？」
メクライ「あんた黙ってて」
音羽「黙ってらんないよ」
メクライ「黙ってろって」
音羽「ふざけないでよ。お姉ちゃんが自己管理出来ないからこんなことになってんでしょ」
メクライ「はあ？」
音羽「はあじゃないでしょ。更生する更生するって泣きついてお金せびって、結局またお酒に逃げて、お金みんな下らない男に持ってかれてるだけじゃない。もういくら注ぎ込んでんのその男に？」
母「音羽」
音羽、封筒取って「もうこれはやめようよ」

メクライ「ちょっとそれちょっとこっち置いて」
音羽「嫌よ。ほら、もう最悪だよ」
メクライ「ねえ音羽、それはちょっとここに置いて」
音羽「嫌」
メクライ「置きなさいって」
音羽「嫌だから」
メクライ「置きなって！」
母「大きな声出さないで」
音羽「ねえ、お母さん、本当にこれはやめよう。これは本当におかしいもん。ループしちゃってんだよ。だからもっと厳重な施設に入れなきゃ駄目なんだって。絶対その男が出しちゃったか何かしたんだよ。面会出来るようなとこじゃ駄目なんだって」
メクライ「ねえ返してよ」
音羽「これうちのお金だから」
メクライ「私だってうちの子でしょ」
音羽「もうわかんない。どうなのかな」
母「音羽」
メクライ「どういうことよ？」
音羽「だってそうでしょ。お姉ちゃんの所為で、お母さんもだけど、お父さんなんかもう見てられないからね」
メクライ「何が？」
音羽「お姉ちゃん、もうその男と別れて、ちゃんとした治療受けて」
メクライ「・・・わかんないなあ」
音羽「何がわかんないの？」
メクライ「わかんない、何にも。全然わかんないなあ、だって。何だかわかんない。とにかくそれくれるんだったら欲しいの。とにかくもう必要なの」
音羽「何に使うの？」
メクライ「えー、だって、何が、どういうこと？」
音羽「は？何に使うのか聞いてんの」
メクライ「だから、なんかなあ、そういうのがもう本当になあ。じゃあわかった。もうお父さんに話す。お父さん奥にいるんでしょ。久々にお父さんに会いたい」
母「駄目」
メクライ「何が？」
母「・・・」
メクライ「何が、何が駄目なの？」
母「お父さんは駄目」
メクライ「お父さんは駄目って何なの？お父さんに会っちゃ駄目ってこと？お父さんなのに？」

母「・・・」
メクライ「お父さんに会わせて」
母「駄目よ」
メクライ「お母さん、お父さんに会わせて」
母「駄目」
メクライ「お父さんに会いたいの！」
母「・・・お父さんはあんたに会いたくないって」
メクライ「・・・・え？」
母「・・・」
メクライ「嘘言わないで」
母「本当よ。もう会いたくないって。嫌なんだって」
メクライ「・・・」
音羽「ねえお姉ちゃん坐って」
メクライは首を振る。
音羽「お姉ちゃん」
メクライ首を振る。
音羽「お願いだから」
メクライ「音羽、それ頂戴。そしたらもう来ないから」
音羽「お姉ちゃん、ちょっと坐って」
メクライ「お願い」
音羽「違うよ、それは、だって」
メクライ「お願いだから。もう坐りたくないの」
母「渡してあげなさい」
音羽「・・・」封筒を差し出す。
メクライはそれを取って中を見る。
音羽「ねえ」
メクライ「行くね。すんませんでした」
音羽「ねえ」
メクライ「さよなら」
音羽「お姉ちゃん」
メクライ「お父さんにもそう言っておいて」
メクライ家を飛び出す。瞬間、美雲と謎郎もメクライを見失う。
謎郎「あれ？」
美雲「いなくなっちゃった」
謎郎「あの、彼女の行き先に心当たりは？」
音羽「わかりません」
謎郎「お母さんは？」

母はただ放心したように首を振る。
美雲は闇雲にメクライを追おうとする。
謎郎「待って」と謎郎は母たちを示す。
ゆっくりと立ち上がった母はよろめく。音羽支える。
音羽「大丈夫？」
母はびっくりしたように音羽を見て、その腕をすっと払いよけ、ゆっくりと誰かを探すように去って行く。音羽は懐から小さな酒瓶を出して隠れるように飲むメクライの面影を見つめ、去る。
美雲「何をしているの？」
謎郎目田を探して「目玉だよ。ここで落としてしまったのかも」
美雲「ここじゃないと思う」
謎郎「うん」
美雲「だったらどうしてそんな無駄なこと」
謎郎「目玉を探すのが仕事だからさ」
美雲「でも明らかにここにないとわかって探すなんて馬鹿げている」
謎郎「たまにこうして探さないとわからなくなるからね」
美雲「どういうこと？」
謎郎「何をしているのかをさ」
美雲「不便ね」
謎郎「そうかね？大事なことさ。しかし君も熱心だね」
美雲「そりゃそうよ」
謎郎「何がどうしてそりゃそうよ？」
美雲「だって」
謎郎「だって？」
美雲「名前をつけてくれたもの」
謎郎「なるほど、しかし・・・・まあいいか」
美雲「見つかった？」
謎郎「だから見つからないのさ。よし。聞き込みをしよう」
美雲「諦めないのね？」
謎郎「諦める？どうして？」
美雲「だってなんだか悲しそうよ」
謎郎「俺は一度だって途中で諦めたことはないんだ」

通り過ぎてゆくものたち。

謎郎「あの、すいません」
田端「はい」

謎郎「メクライくんを見掛けませんでしたか？」
田端「メクライ？」
遅れて来た父「ああ、駄目駄目、駄目だって田端さん。不可解なものと関わっちゃいけないとあれほど言ったでしょう」
田端「ごめんなさい」
謎郎「ちょっと話だけでも」
父「早く早く」
美雲「あの、すいません、メクライさんを見掛けませんでしたか？」
上野「さあ。それよりあの男を見なかったか？」
美雲「あの男？」
上野「いや、あの男だよ。ほら」
美雲「えーっと、あの男？」
上野「知らないんだな。ならいいんだ。だがあの男を見つけたら教えてくれ。母の水着を脱がすような男だよ」
美雲「はあ」
謎郎「なあ君、メクライくんを見掛けなかったか？」
女生徒「メクライ？知ってる？」
新聞配達人「さあ。ちょっとわからないですね」
謎郎「どんな小さな情報でもいいんだ。なあ、おい、行ってしまった」
美雲「え？」
謎郎「何？」
美雲「どうして新聞買わなかったんです？」
謎郎「あ、そうだ。ああ、しかし行ってしまった」
美雲「追いかけましょうか」
謎郎「しかしもう追いつけまい。見えなくなってしまった」
美雲「あの、すいません」
店員「はい、ご注文は？」
美雲「いえ、食べに来たわけじゃないんです。ちょっとお聞きしたい事があって」
店員「ちょっとウチはこの時間ご注文頂かないことには」
謎郎「じゃあ夏カレーを一つ」
店員「お客様は？」
美雲「えっと、私はいいです」
店員「一応皆様ご注文頂かないことには」
美雲「じゃあ私も夏カレーを」
店員「夏カレーツー」
謎郎「それで」
店員「ちょっとメクライさんという方はわからないですね」

謎郎「お腹は空いてないわ情報も得られないわ」
若き映画監督「ああ、やっぱりここにいた。考えてみたら待ち合わせ場所もはっきりとは決めずにいたから不安になっちゃったよ。ここ坐っていい？あれ？」
謎郎「なあ、あんた、メクライくんを見なかったか？」
若き映画監督「いやあ、今から会うことになってますけど、あれえ？」
美雲「ひょっとして中国語のクラスの帰りですか？」
若き映画監督「え？まあそうだけど。おかしいな。ここに来ればメクライさんに会えたような気がしていたんだけど。ところで君ってウチの大学？どこのクラスの子？あの俺さ、ちょっと映画撮ってるもんなんだけど、ちょっと時間あるかな？」
美雲「これこの間のあれですよ」
謎郎「出よう」
若き映画監督「え？ちょっと話だけ聞いてよ」
美雲「そうやってふざけ半分で生きてると、最後にはあなたが独りぼっちになりますよ」
若き映画監督「え？」
謎郎「あ、おい！君ら」
目玉探偵A「おお」
謎郎「なあこの辺りで、いやどの辺りでもいいんだがメクライくん見なかったか？」
A「いや。メクライくんは見てないね。それよりこれ見てくれよ」と写真を見せる。謎郎も美雲もショックを受ける。
謎路「何だよこれ」
緑秘書「スコップのブレの行く末ですよ」
A「少年は突然スコップをこうやって」
美雲「ひどい。まだこんなに小さな女の子が」
緑秘書「スコップでこうですよ」
謎郎と美雲はショックを受ける。
Aは謎郎に「じゃあ行こうか？」
謎郎「何処に？」
A「何処って」
謎郎「何処？」
A「だからこの写真を見せにだろう」
謎郎「誰に？」
A「誰にって・・・」
緑秘書「出逢った人にですよ、ねえ」
A「そうそう。出逢った人にこれを見せるんじゃないか。ティッシュを渡すようにすっと見せたらわってなるだろう。ブレてくるぞ。ブレが広がって行く。それでこうして陸をやってきたんだろう」

謎郎「だろうって俺は知らない」
A「何言ってんだ。ボートでそういう話をしただろう。貝撒いて写真撮った後。だってそもそも君がこの写真も撮ったんじゃないか。ん？」
謎郎「は？」
美雲「誰かと勘違いしているのかしら？」
A「あれ？だって君は、いつもここにいる、このほら、私同様特定の名前を持たない」
美雲「それこの人じゃありませんよ。これは謎郎さんでしょう」
A「え？君はここにいたあれじゃない？」
謎郎「いや、違うだろうだって」
A「じゃあ何処行ったんだあれは？緑くん知らない？」
緑秘書「いや、私まだ全体よくわからないままです」
A「つまり行方不明ということか」
緑秘書「ひょっとしてそれを探していたんじゃありませんか？」
A「ああ、行方不明なのは誰なのかを探していたということだな」
緑秘書「で、それは結局そのいつも隣にいたあの探偵仲間だったというわけですね」
A「なるほど。じゃあ見事この件は解決したというわけだな」
美雲「でもその人は何処へ行ってしまったんです？」
A「それなら安心したまい。もうこうして探し始めている。だってそうだろう」
美雲「まあそうですね」
緑秘書「誰かの頭の中なんかに呑み込まれてなければいいけれど」
A「そういうこともあるかもしれない。謎郎くん、見掛けたら連絡してくれないか」
謎郎「ああ、構わないけど。そっちもメクライくんを見つけたら連絡してくれ」
A「うん。連絡しよう。しかしどうもここのとこ妙だなあ」
緑秘書「ええ。何か紛れ込んだのかもしれませんよ」
A「うん。そういうこともあるやもしれん」
緑秘書「では失礼します」
美雲「どういうことですか妙っていうのは？」
謎郎「いや、なに、こっちも色々あってね」
美雲「色々？」
謎郎「つまり、慣習っていうのかな、慣れみたいな。だからあれだよ、新しいことってあるだろう。だけど新しいこともやがて古くなるっていう。答えはないってわかっているつもりでいても、答えはないっていうルールに囚われ始めたら同じことだろう。そういう蔓延だよ。そうなると古いことがまた新しくなったりして、結局どん詰まりになるんだ。いやいやそうなったわけじゃないけど、そういう足音って聞こえた時にはもう入り込んでいる可能性が高いは高い。という話をしている時点で・・・」
美雲「とにかく混沌が混沌に囚われ始めたってことね」

謎郎「ああ、そうそう。凄いな。その通りだよ。混沌にルールが出来ると途端に貧相になるんだ。でもこの話はもうやめよう」
美雲「どうして？」
謎郎「解析すればするほど可能性を失うから。解析だの論理だのに呑み込まれたが最期、彼女の目玉も、いや彼女さえも、見失ってしまうかもしれないからね」
受付嬢「いらっしゃいませ」
謎郎「え？」
美雲「どうしたんです？」
受付嬢「いらっしゃいませ」
謎郎「はいはい」
美雲「あら？謎郎さん？」と謎郎を見失う。
受付嬢「70分のコースで宜しかったですね？」
謎郎「あ、うん。70分」
受付嬢「こちらフレイバーの方をお選び頂けるんですね。お代金の方はこちらのリッチコース以外は追加料金掛かりませんのですが」
謎郎「あーじゃあまあ人気あるやつでいいよ」
受付嬢「そうするとこちらのフレイバーになりますが」と嗅がせる。
謎郎「ああ、全然いいよ」
受付嬢「ありがとうございます。ではこちらのフレイバーで施術させて頂きますね。傘の方は？」
謎郎「傘？雨降ってる？」
受付嬢「ええ。今日はもう一日中」
美雲は雨に打たれながら謎郎を探しに。
謎郎「傘ないから」
受付嬢「ではこちらの個室の方へ」
謎郎「はいはい」
受付嬢「ではこちらが担当のメクライです」
謎郎「え？」
メクライ「担当させて頂きます、メクライです」
謎郎「ああ、はいはい。うん」
メクライ「ではどうぞ」
謎郎は薄暗い個室に。
謎郎「随分暗いな」
メクライ「お客様にリラックスして頂こうと」
謎郎「あ、そう。でもこういんだと怖くないの？」
メクライ「怖いと言いますのは？」
謎郎「いや、だって男とこんな2人っきりで」

メクライ「いえ、お客様皆さん、デトックスとしてご利用ですので」
謎郎「そう」
メクライ「もちろん。では上半身お脱ぎになってください」
謎郎「あ、そう」
メクライ「はい。アロマオイルのマッサージですので」
謎郎脱ぐ。
受付嬢「あ、お客様！」
田端「お父さん！」
父「これお前風俗じゃないって言えるのか」
メクライ「ちょっとお父さん」
父「裸の男にこんな場所でオイル塗るのが風俗じゃないってどの口が言えるんだ！」
メクライ「お父さん、お客様いるんだから」
父「あんたは出てけ」
謎郎「いや」
メクライ「申し訳ありません、大丈夫ですから。お父さん」
父「いいから出てけ」
メクライ「やめて。ちゃんとしたこれは施術なんだから。治療みたいなもんなの」
父「男の裸をぬるぬる撫でるのが治療だと？こいつらがどんな目的で来てるかわからんほどおかしくなったか」
メクライ「ちゃんと資格取ってやってるの」
父「こんな風俗に資格なんかいるもんか。いるのは下衆な諦めだけだろう」
謎郎「まあお父さん」
父「お前は出て行け！」
メクライ「お客様本当に申し訳ありません」
父「なに色目使ってんだ！」
父はメクライを滅茶苦茶に殴りつける。
音羽「お父さん！お姉ちゃん死んじゃうよ」
受付嬢「お客様、こちらへ」
謎郎「はあ」
避難する謎郎。父は田端に止められているが興奮覚めやっていない。メクライは泣くことも出来ない。
父「何がまともな職につきましただ、バカヤロウ。心入れ直しますが聞いて呆れるわ！」
メクライ「ちゃんとやってるの」
父「やってない！」
メクライ「ちゃんとやってるんだよ」
父「やってない！」

店の男「お客さん、悪いけど、ちょっと奥来てもらいましょうか」
父「何だと？」
店の男「こんな滅茶苦茶して、タダで済むと思ってませんよね？」
父「ほら見ろ。こういうことだよ。こういう店でお前は働いてるんだ！」
店の男「お客さん」
父「上等だ。音羽、帰ってろ」
音羽「でも」
父「いいから今すぐ帰れ！」
店の男は父を連れて行く。
音羽「大丈夫？」
メクライ「帰って」
音羽「でも」
メクライ「帰ってって」
音羽「お姉ちゃん」
メクライ「じゃあ、もう私が行くわ」
メクライは去って行く。謎郎はそれを追う。
音羽おもとぼとぼ歩き出し、ふと疑問。父の鞄からタッパーを出し、おしんこを食べると、
田端「いけない」と父を追う。

目玉探偵Bの華麗過ぎる高広（たかひろ）代行

目玉探偵Bは完全に道に迷っている。酒を飲んでいる女に声を掛ける。
B「あの」
メクライは酒瓶を隠して「やだ、帰ってたの？」
B「帰ってた？」周りをじっくりと見回して「あ、帰ってたのか」
メクライ「何？」
Bなのか「いや、別に」
メクライ「これ」と封筒を出す。
Bなのか「ん？」
メクライ「借りてきたの。実家で」
高広「ああ、貰えた」
メクライ「うん」
高広は札束を数える。
メクライ「ご飯食べたの？」Bは答えず数えている。「なんか作ろうか。チャーハンと餃子あったと思うからチンするね」

高広「いらねえや」
メクライ「え？」
高広「約束あんだ」
メクライ「あ。そうなの？え？誰と？」
高広「お前これいくら抜いた？」
メクライ「え？」
高広「これ抜いたろ？」
メクライ「抜いてないよ」
高広「・・・・」
メクライ「これちょっと一杯だけ呑みたくって。それでちょっとだけ」
高広「それ一本買って三万しないだろ？」
メクライ「違うの違うの、だから、これはこれで今日の分でしょう。だから、ほらだって、明日とか、明後日とかもあるでしょう。それに冷蔵庫の中ももうあんまり何にもないから、それで食べなきゃいけないってこともあるから三万円だけあれしたの」
高広「それは俺に全部渡してから、三万くださいって言えばいいんじゃないの？」
メクライ「え？」
高広「だから一旦全部これだけ実家から借りて来ましたって俺に丸々渡してから、それから三万必要だからって言えばいいんじゃないのかって言ってんだよ」
メクライ「うんうん、だけど」
高広「ああ、何かあんだ。何だよ？」
メクライ「ちょっと待ってね」
高広「ああ」
メクライ「だけど、」
高広「ああ」
メクライ「今日高広くんが何時に帰ってくるかとかがわかんないから、」
高広「ああ」
メクライ「それでそれまでの間に、」
高広「ああ」
メクライ「待ってる時間もあるし、」
高広「ああ」
メクライ「それでちょっとあれだったけど、先に抜かせてもらったんです」
高広「だからそんなもんおかしいだろって言ってんの」
メクライ「でもさ」
高広「でもさ、じゃなくってさ。気分悪くないか？こういうことをされるとさ、まるで俺に先に全部渡したらもう貰えないからみたいな感じがするだろう？するよな？」
メクライ「そんなことないけど、じゃあごめんね」
高広「やり直し」

メクライ「ん？何？」
高広「何じゃねえよ、やり直し」
メクライ「えっと、どこからやり直すといいのかな？」
高広「まずその酒よこせ」
メクライ「・・・」
高広「おい！」
メクライはびくっと出して渡すとBはその酒瓶を放り投げる。酒瓶は割れる。メクライは怯える。
高広「金」
メクライ「え？」
高広「残りの金だよ」
メクライは残りのお金を渡す。
高広「じゃら銭もだろ」
メクライは小銭も出して渡す。
高広「安っい酒買ったなあ」
メクライ不器用に笑って頷く。
高広「よし、じゃあいいよ」
メクライ「え？」
高広「いくらか欲しいんだろ？頼んでみろよ」
メクライ「あ、そっか。そうかそうか。あの、お金が必要で」
高広「ああ」
メクライ「ちょっと正直お酒もちょっとだけ飲みたいし、それから食事代とか生活費とかもあるんで、
高広「ああ、それでいくら欲しいの？」
メクライ「三万円ください」
高広「やるか馬鹿」と封筒で朝緒の頭を叩く。
メクライ「・・・」
高広「何さっきの酒代浮かせようとしてんだよ。そういうのがお前グロいんだよ。じゃら銭だけやるよ」とばらまく。「んじゃちょっと俺出掛けてくるわ」
メクライ「何処行くの？」
高広「何でそんなことお前に言う必要あるか？」
メクライ「じゃあ何時帰ってくる？」
高広「お前俺の話聞いてないんだな。悲しいわ」
メクライは高広の足掴む。
高広「何やってんだよ」
メクライ「何時に帰ってくるかだけ教えて」
高広「放せ」

メクライ「何時か教えてくれるだけでいいから」
高広「放せって言ってんの！」とメクライを蹴る。
父「おい貴様！」
と父はBを引きはがし、倒れたところを蹴りつける。
高広「ちょっと何すんだよ？」
父「何すんですかじゃない！お前こそどういうどういうつもりだ娘に向かって！」
高広ではなくB「ああ、いやいや、違う。違うんです」
父「何が違う？何も違わん！」
B「いや違うんですよ、これ、代行ですよ代行ですよ！」
父「何？」
B「いやこれ代行なんですよ多分」
父「代行？」
B「はい」
田端「さっきお父さんと私もなっちゃったほら」
父「ああ・・・何だったんだあれは？」
B「だから代行でしょう」
父「代行・・・でも駄目だ許せん」と掴み掛かろうとする。
B「いやいやいや本当に本当に」
父「あんた仕事何やってんだ？」
B「探偵です」
父「探偵だ？」
B「はい。目玉の探偵やってます」
父「目玉の探偵」
B「はい」
父「馬鹿にしてんのか！」
B「本当なんですって」
父「今度娘に手出してみろ、いや、半径３００キロ圏内に入ってみろ・・・娘何処やった？」
確かに朝緒はおらず、田端がいるばかり。
父「田端さん、娘は？」
田端「え？今の人？行っちゃいました」
父「行っちゃった！？」と父が手を放した隙にBは電光石火で逃げ去って行く。
父「あ、貴様！」しかしもう追いつかない。
父「どうして行かせたの？」
田端「いや、だって」
父「何？」
田端「不可解なものとは関わらないようにしないとってお父さんが」

父「不可解じゃないでしょう。朝緒だろう。不可解じゃないよ」
田端「朝緒さん？」
父「朝緒だよ。一緒に探してた朝緒。どうして行かせちゃうかなあ」
田端「でもなんかそうは見えなかったから」
父「だってじゃどんな風に見えたのかなあ」
田端「何て言うか」
父「何？」
田端「メクライさん？」
父「メクライさん・・・聞いた事ある」
田端「さっきマッサージ店で」
父「いやいやいや、違うんだあれは。それに彼女は朝緒ではなかった」
田端「なんかわかんないんですけど、でもやっぱり、ふっとさっきのメクライさんだと思っちゃって」
父「ふっとね」
田端「はい」
父「メクライメクライ」
田端「はい」
父「口にするたびに心が痛む」
田端「大丈夫ですか？」
父「よし、ちょっとおしんこ食べておこうか」
田端「はい」
父「じゃこれ一つ食べておいてね。それでそれで」と鞄の中をごそごそやって、財布から写真を取り出す。朝緒の写真。「田端さん」
田端「はい」
父「これが朝緒です」
田端「知ってます」
父「知ってたらどうして行かせちゃったのかな」
田端「でも、でもあれはお姉ちゃん、いやメクライさんだったから」
父は頭を抱えるが。
父「じゃあ朝緒もそうだけど、念のためメクライさんも探す事にしよう」
田端「はい」
父「ね。しかし何だって朝緒もあんな男と・・・佐藤くんは知ってるのか、ちょっと、あ、田端さん、携帯電話か何か持ってる？」
田端「いや授業からそのまま出て来ちゃったんで」
父「そっか。じゃあ家の電話からすればいいのか」と父は電話する。

佐藤くんとの電話と、世界を跳び越える

佐藤「あ、もしもし」
父「佐藤くんか」
佐藤「あ、お父さんですか。すいません」
父「いやいや」
佐藤「週末にまた伺いたいと思ってるんですけど」
父「いや、それもそうなんだがね、その、君はあれ知ってるのか？」
佐藤「あれと言いますと？」
父「だからその、あれだよ。朝緒のその」
佐藤「何かあったんですか？」
父「うん。いや、その、ここんとこの状況というか」
佐藤「いや、実際、あの、あれがあってからは全然話してもくれなくって」
父「そうだよね」
佐藤「あのこの間ももう一回主治医の宮本先生のところに行って、」
父「あ、うん」
佐藤「本当に朝緒にはまったく責任がなくて、本当にやむを得ない状況の中での判断だったんだから、下ろしたとは考えずに流産と受け止めるべきだって、色々なケース含めて手紙に書いて頂いたんですよ」
父「ああ、そうなの」
佐藤「これだけ時間経っても先生凄い心配して下さってて。本当に気を遣って頂いていて。それをまた僕が自分の手で渡さなきゃって思ったもんですから、それで結局今日もああして逃げちゃって話せなくって。手紙お渡ししておけば良かったですね。なんか僕も空回りしちゃってて」
父「いやいや」
佐藤「今、朝緒、まだ仕事ですか？」
父「いや」
佐藤「今います？」
父「いないんだ」
佐藤「そうですか」
父「うん、申し訳ない」
佐藤「いやいやお父さん、やめてくださいよ。僕がしっかりしてないから」
父「いやしっかりしてないのは俺だよ」
佐藤「そんなお父さん」
父「朝緒は、必ず君の元に帰すから」
佐藤「・・・」
父「絶対に」
佐藤「ありがとうございます。それで何かあったんですか？」

父「いや、大したことじゃないんだ」
佐藤「そうですか？」
父「うん。また連絡します」
佐藤「はい。あのいつでも連絡くださいね。携帯連絡頂けたら出られなくても後で折り返せますんで」
父「はい」
佐藤「じゃあ失礼します」
父「失礼します」
父は電話を置く。
田端「大丈夫ですか？」
父「うん」
田端「あの」
父「ん？あ、お茶でも飲みますか？」
田端「ほら。なんだかお父さんお家の居間にいるようですけど」
父「そりゃそうだよ。どうして？あ、本当だ」
田端「帰れたんですね」
父「ということは」
父は朝緒の部屋へ急ぐ。しかし朝緒はいない。
田端「朝緒さん、いました？」
父は首を振る。田端、朝緒の部屋の方を覗くがいない。
田端「いませんね」
父「うん」
田端「どうしましょう？」
父ウロウロと家中を歩き回ったり捻ったり。
田端「お父さん？」
父「うん。さっきのようなところに戻るにはどうすればいいんだろう」
田端「さっきのようなところって」
父「だからそのああいう、何だかその、色々あったろう、あのほら朝緒じゃなかったっていうほら、ええっと、目の見えないような名前の」
田端「メクライさんのいる？」
父「そう。メクライという名の朝緒がいる。いやいやメクライさんはメクライさんであれが朝緒なんだが」
田端「潮干狩りの出来る」
父「そうそう！そんなような。いやそれだよ。潮干狩りのような」
田端「この夕闇の中」
父「そうだ。我が家は夕闇の中」
田端「また迷ってしまいますよ」

父「しかし朝緒を佐藤くんのところに戻さなきゃならんのだ」
田端「私はこっちにいますけど」
父「え？君は夕闇にいるのか？」
田端「はい、こっちは夕闇です」
父「そっちは夕闇か。しかし、しかし、そうは見えんがねえ」
田端「でもそうなんです。お父さんは居間にいらっしゃるようですけど」
父「別の場所にいるってこと？同じ場所にいるのに？」
田端「そうですね」
父は混乱しそうになるが、おしんこを食べて。
田端「大丈夫ですか？」
父「大丈夫です。そっちが夕闇なんですね？」
田端「ええ」
父「じゃちょっと引っ張ってくれませんか」
田端「え？」
父「試しにちょっとそっち引っ張って」
田端「はい」
田端が父を引っ張ると、父はずるんと夕闇に。夕闇を見つめる父。
父「……我が家にこんな荒野が広がっていたとは」
田端「どっちに行きますか？」
父は何か言い表しようもない感情に声も出ず。
田端「……泣いているの？」
父「いや、泣いちゃいませんよ。泣いちゃいませんがね」
田端「お父さん」
父「こんな、こんな荒野に娘を放っぽって私は」
田端「一生懸命探そうとなさってるじゃないですか」
父「足りませんね。ちっとも足りませんでした」
母「お父さん」
父「母さんか」
母「来てたんですね、えーとあなたもほら」
田端「田端です」
母「そうね、田端さん」
父「見たかい、この」と夕闇を見る。
母「ええ。途方もないですね」
父「ああ。途方もない」
母「私はね、お父さん、何だかとっても辛い事がありましたよ。本当に、とっても辛かった」
父「そうか」

母「はい」
父「そんな顔してら」
母「そう」
父「うん」
母「お父さんも」
父「・・・一緒に探すか？」
母「はい？」
父「朝緒だよ、いやこっちでは何て言ったか」
母「メクライ」
父「そう、それ。なんだい母さん、知ってるのか」
母「知らないのよ何にも。ただそう感じたことは感じたわ」
父「そうか。何だかわからないが。とにかく行こう」
母「きっと探したって駄目ですよ」
父「え？じゃあどうするんだ？」
母「ここにこうして腰掛けていましょう」
父「そしたら向こうから来るって言うのか」
母「さあわからないけれど」
父「来ないだろう」
田端「もし来たらどうするんですか？」
父「しかし待っててても来ないだろう」
田端「もし待つとして、更に来たとしたら」
父「そりゃあ、捕まえるっていうか、声掛けて、帰って来いって。なあ」
母「声は掛けずにおきましょう」
父「声も掛けない？」
母「声掛けたって戻って来るもんでもない気がするんです。だから朝緒を見つけても、声は掛けずに、向こうが帰ってくるって言うまで待ってあげましょうよ」
父「ただ待つのか」
母「そう。あとはじいっと見るんですよ」
父「見る」
母「ここからじいっと娘を」
父「ただここでじいっと朝緒を？」
母「ええ」
父「でもこれどう思います？」
田端「さあ私には」
父「・・・まあ、とにかく少しの間、ここに腰掛けていてみようか」
母「そうしましょ。歩き回るより、色々わかるかもしれないし、あの子のことだもの、きっと戻って来るでしょうよ」

父「どうします？」
母「あなたもそうなさい、ほら、えーと」
田端「田端です」
母「田端さん、何のお構いも出来ませんけど」
田端「じゃあお言葉に甘えて」
と三人腰掛けて夕闇を見つめる。
母「あ、お父さん、何かが遠くの方で煙を立てて走ってる。何かしらあれ？」
父「ああ、何だろうなあ。遠くてわからないけど」
田端「オートバイですよ」
父「オートバイか。ああ、オートバイだな」
田端「ええ。2人乗りしたオートバイ」
母「若い頃を思い出すわね」
父「馬鹿言うな」
しばし遠く荒野を走っているオートバイを見つめているのか。
田端「行ってしまう。あ、手を振った」
父と母の表情がふっと変わって、オートバイを見送ってから、顔を見合わせて、すぐに逸らす。
父「そんな馬鹿な」
スコップを持った上野先生がばしゃばしゃと水しぶきを立ててやってくる。追いつめられた様子で辺りを見回す。と、自分が今いる場所がとても不安になってきたのは、来てはいけない場所に来てしまったからなのか。そこに玲音も現れる。
玲音「七叉路ですよ」
上野「ああ、見たらわかるさ」
玲音「選ばないんですか？」
上野「選ぶって何が？」
玲音「どれかの道に」
上野「選んでいるところだ」
玲音「どれか一つは行きたいところに行ける筈ですよ」
上野「何だそれ？」
玲音「聞いたんです。秘書の人に」
上野「ほお」
玲音「だからきっとこうして足がすくむのね。先生は？」
上野「すくんじゃいないさ」
玲音「どうしてスコップ持ってるんですか？」
上野「ああ、ちょっとあってな」
玲音「あるって？」

上野「すべきことがだ。なあ、変なこと聞くが、君、俺の妹じゃないよな？妹って言っても血は繋がってないんだが」
玲音「さあ、違うと思いますけど」
上野「だよな。違うよね」
玲音「え？もし妹だったらどうなんですか？」
上野「え？妹なのか？」
玲音「ううん。もしそうだったら」
上野深刻に「そうなんだったら離れてろ」
玲音「どうして？」
上野「面倒なことになるからさ」
玲音「それなら離れていましょうか」
上野「じゃあ妹なんだな」
玲音「違いますけど」
上野「まあどちらにしてもあまり近寄らない方がいい」
玲音「で、もう選んだんですか？」
上野「選んでるよ。だから、選んでるんだけど、その、行きたいところに行けない場合はどうなるんだ？」
玲音「それはわからないけど」
上野「君はどうするんだ？」
玲音「私はもう少しここにいるわ」
上野「そうか。なあ、元来た道に戻りたいときはどっちに行けばいいんだ？」
玲音「どっちから来たの？」
上野「それがわからないから聞いてるんだ」
玲音「そしたら私にもわからないと思うけど」
上野「そうか。そりゃそうだな、馬鹿なこと聞いた」
玲音「でも」
上野「何だ？」
玲音「わからないってことは戻りたくないってことなんじゃないのかな」
上野「・・・そんな筈ない。なあ、じゃあ君がどっちか示してくれ。示してくれた方に俺は行く」
玲音「意味ないんじゃないから」
上野「いいから示してくれ」
玲音「じゃああっち」
上野「ありがとう」
上野は行きかけるが立ち止まって、後ずさる。
上野「んんん」
玲音「だからやっぱりそうなのよ。戻りたくないのよ」

上野「いや、もう一回、もう一回だけ」
玲音「あっち」
上野「ありがとう」
上野行くがやはり足が止まり、後ずさる。
上野「んんん」
玲音「少し考えたら？」
上野「え？」
玲音「急いでいるわけじゃないんでしょう？」
上野「いや、急いでるは急いでいるんだ」
玲音「だったらさっさと選んで行けばいいのに」
上野「んんん」
玲音「ここいいですか？」
母「あら、どうぞ」
玲音「皆さん、立ち止まってらっしゃるんですか？」
母「ええ。まあそうですね。そうよね、お父さん」
父「ま、そんなところです」
母「あなたもどうですかこの辺りで」
上野「しかし」
母「お探しになってるものも、ひょっと向こうからやってくるかもしれませんよ」
父「そうですよ先生、そうだ、おしんこ、どうですか」
母「先生？」
父「そうさ。朝緒の高校の時の先生だ」
母「まあそう。じゃあ先生、本当にこちらへどうぞ」
上野「・・・・じゃあ、少しだけ」
上野も離れて坐る。父はおしんこを持っていき、
父「さ」
上野「はあ」
父「女房が漬けたんです。お口に合うかわかりませんが」
田端「とっても美味しいですよ」
上野「・・・じゃあ」
父「さあ、君も」
玲音「ありがとうございます」
ぽりぽりと玲音と上野はおしんこを齧る。
母「ここ七叉路なんですか？」
玲音「ええ、そうみたいですよ」
母「へえ。見る人によっては七叉路なんだね」

メクライからの電話と、旅の終り

美雲と謎郎、ぴたりと足を止める。顔を見合わせ、朝緒はいないかと辺りを見回す。
美雲「どこにいたんです？」
謎郎「メクライを追っていたんだ。君は？」
美雲「謎郎さんとはぐれて、私もメクライさんを。マッサージ店」
謎郎「ああ！知ってるのか？」
美雲「ええ」
謎郎「なんとも巻き込まれた」
美雲「そうみたいね」
謎郎「それでどうしてここに？」
美雲「わからないけど、きっと他にないから」
謎郎「うん」
美雲も頷く。
謎郎「突然終わることがあるから気をつけて」
美雲「え？」
謎郎「唐突にってこともあるから」
美雲「でも何を気をつけるんです？」
謎郎「盗ったものはさ、返しておかないと、再会のためにも」
美雲「知ってたんですか？」
謎郎「知らないけどさ、可能性を広げてみただけさ」
美雲「さすが」
謎郎「いやいや」
美雲が笑うと謎郎も笑う。
電話が鳴る。２人は再び顔を見合わせる。謎郎が電話に出る。
謎郎「もしもし。はい。はい。そうですが。はいはい。ちょっとお待ちください」
受話器を押さえて謎郎「おそらく君にだ」
美雲「私に？」
謎郎「うん」
美雲「そうね」
謎郎「どうする？出る？」
美雲「はい」
謎郎「じゃあほら。電話」
美雲暫く考えて「また？」
謎郎頷く。
美雲「いないと言って」
謎郎「そうはいかないよ」

美雲「そんな気分じゃないの」
謎郎「でももういると言ってしまったんだ」
美雲「じゃあお風呂に入っていることにして」
謎郎「いいから出なさい」
美雲は渋々電話を受け取り、溜息をついて。しかし受話器に向かっては努めて平静に。
美雲「もしもし」
メクライ「もしもし」
美雲「ひさしぶり」
メクライ「ひさしぶり」
美雲「どうしたの？」
メクライ「別にどうってことないんだけど、どうしてるかなと思って。いないかと思った。ほら携帯の番号変えたでしょ？それでほらあの子、何だっけ、ほらあのクラス一緒だった田端さんに聞いたら田端さんも新しい番号は知らないって言うから自宅の番号聞いたんだ」
美雲「それこの間聞いたよ」
メクライ「あれ？そうだっけ？」
美雲「そうだよ。だってこの間も電話くれたじゃん」
メクライ「そっか。そうだよね。ごめんごめん」
美雲「いいよいいよ。それで？」
メクライ「それでって？」
美雲「どうしたの？」
メクライ「いや、別にどうってこともないんだけど、何かちょっと喋りたくて」
美雲「何を？」
メクライ「え？何って、何か、何喋ろっか。何か最近どう？」
美雲「別にどうってともないかな」
メクライ「仕事楽しいの？スーパーで働いてるって田端さん言ってたけど？」
美雲「別に普通だよ」
メクライ「そうなんだ」
美雲「そっちは？」
メクライ「私はだってほら、そんなに仕事って感じじゃないけど、ああ、でもたまに知り合いの仕事手伝ったりしてるかな。ま、それも別にどうっていうもんでもないし。お父さんお母さん元気なの？」
美雲「うん」
メクライ「あ、そうなんだ。いいね」
美雲「え？そっちは？」
メクライ「元気だよ。お父さんはわかんないけど」

美雲「そうなんだ」
メクライ「うん」
沈黙。
メクライ「あ、ごめん、忙しいよね」
美雲「うん。ううん、別に大丈夫だよ。そっちは大丈夫？」
メクライ「あ、全然大丈夫。ご飯もう食べたの？」
美雲「え？何で？」
メクライ「ううん、違う違う、これから一緒に食べようとかじゃないから大丈夫」
美雲「いやいやそういう意味じゃなくて」
メクライ「ただただ何食べたのかなってだけよ」
美雲「あ、何かアジフライかな」
メクライ「あ、そうなんだ。アジフライかあ。いいなあ」
美雲「うん」
メクライ「美味しかった？」
美雲「まあ別に」
メクライ「そっか」
沈黙。
メクライ「ごめん」
美雲「どうしたの？」
メクライ「いや実はさ」
美雲「ん？」
メクライ「彼が帰って来てなくて、何時に帰ってくるかわかんないんだよね。それですっごい何か辛いていうか、不安になっちゃってさ」
美雲「あ、例のカッコいい彼？」
メクライ「あれ、カッコいいって言ったっけあたし」
美雲「言ってなかったっけ？」
メクライ「言ってたかな」
美雲「でもカッコいいんでしょ」
メクライ「まあね」
美雲「さすがモテるからよりどりみどりだよね昔から」
メクライ「ははは」
美雲「それで何だっけ？」
メクライ「え？」
美雲「あれ？何の話だっけ？」
メクライ「ああ、別にただ彼が」
美雲「彼どうしたの？」
メクライ「帰って来る時間わからないの」

美雲「そんなの男だったらあるでしょそういうときも」
メクライ「旦那さんもそうなの？」
美雲「わかんないけど、とにかくそういう時もあるよ」
メクライ「そうかなあ」
美雲「そうだって」
メクライ「怖いんだよねえ」
美雲「ねえもう子供じゃないんだからさ、大丈夫だって」
メクライ「そうかなあ」
美雲「そうだよ」
メクライ「帰って来ないんじゃないかと思ってさ」
美雲「大丈夫だって」
メクライ「でも時間がわからないの」
美雲「だからじゃ電話してみたら？」
メクライ「電話もってないのね」
美雲「ああ、そうなんだ知らないけど」
メクライ「何時に帰って来るのかなあと思って」
美雲「そろそろ帰ってくるんじゃないの？」
メクライ「それはないと思う」
美雲「じゃいつ帰ってくるかね」
メクライ「うん。何時かだけでも違うんだけどな」
美雲「私あんまり時間とか気にしないけどね」
メクライ「私は気にするの！」
美雲「・・・ああ、そうなんだ」
メクライ「そうなの」
美雲「そっか。とりあえず何かテレビとかつけて待ってたら？」
メクライ「テレビかあ」
美雲「うん、じゃちょっとあんまり家の電話で長く話すとあれだからさ」
メクライ「あ、そうだよね」
美雲「うん、ごめんね」
メクライ「でも、あの、そう、わかってんだけど、これだけ言いたい事があって」
美雲「はいはい」
メクライ「私、なんか、凄い・・・・・」
美雲「・・・・何？凄い何？」
メクライ「・・・・話が出来て嬉しかったよ」
美雲「・・・・あ、私もだよ玲音」
玲音「じゃあね朝緒」
朝緒「あ、ねえ」

しかし電話は切れてしまう。がくんと膝をつく、朝緒と美雲。玲音は酒瓶を取り、ぐいっと乱暴に飲んで、深く息をつき、朝緒を見る。
玲音「それで朝緒はどうするの？」
朝緒「それで私がどうするか？」
玲音「そうよ。それでこうして迷い込んだんでしょう」
朝緒「そうなのかしら」
玲音「きっとそうよ」
朝緒「そうかもしれない」
玲音「色々大変なんでしょう？」
朝緒「色々本当に大変よ」
玲音「色々本当に大変よね」
朝緒は考えている。
玲音は酒瓶を差し出して、「どう？」
朝緒は酒瓶をじっと見つめる。
長い長い時間が流れる。
朝緒は酒瓶に手を出さない。
母「ほらお父さん、私の言った通りでしょう」
父「ああ本当だ。母さんの言った通りだ」

朝緒はそれをポケットの中に

朝緒は何かを見つける。周りを見回すと誰かがいない。朝緒は大事そうにそれを拾ってポケットに入れる。そして世界を見つめる。そして試しに片目を瞑って見る。そしてじいっと見渡してみると、探偵たちのいるあの場所のみんなが見える。両目を開くとそれは消えた。片目を瞑ると広がる世界があることを大切に大切にポケットの中に入れて、朝緒は歩き出す。その顔は決して明るくはないが、はっきりと絶望の色は消えている。
雑踏の音と、ダイケーマートのレジの音、騒がしい教室の始業のベルの音が聞こえている。

おしまい